
S・S・S～メイド様のキ・ケ・ンなご奉仕～

弓月 渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・S・S〱メイド様のキ・ケ・ンなご奉仕 〱

【Nコード】

N60000

【作者名】

弓月 渡

【あらすじ】

近衛隊長のノアが敬愛する国王陛下の執務室の扉を開けると、そこにいたのは人外魔境な美貌のメイドと子豚のように太った男でした。「も、もしや陛下？」とショックなど受けていられない。太った陛下の影に陰謀を感じたノアは謎のメイドダダリアに疑いの目を向ける。しかしスペシャルにセクシーなメイド様のご奉仕にはキケンと秘密がいっぱいで？ 架空の近代的国家を舞台に、陛下至上主義でスーパーノーマル属性の近衛隊長がSM女王のようなメイドと時に反発したり、時に急接近したりしながら、陛下に降りかかっ

た陰謀っていうか脂肪を取り除こうと行動する、爽快アクションラ
ブコメディー（になればいいな！）

プロローグ

「陛下……」

焦る気持ちを抑えながら、近衛隊長のノアは長い廊下を足早に進んだ。

目指すは敬愛する国王陛下の執務室。

カンナリオ王国の第15代国王、エマシユオン国王陛下は温厚で誠実な人柄で、国民から絶大な人気を誇っている。

普段は気さくな陛下だが、ここぞという時は威厳に満ち、その決断力や判断力に家臣は敬服せざるを得ない。

もちろんノアも近衛隊の一員として陛下の側で仕える上で、陛下の人柄に心から感服させられ、陛下に命を捧げる所存であった。

その全てを捧げ、お仕えしてきた陛下の身に何があったのか――。

きっかけは一ヶ月前に届いた手紙。

いや、もしかしたら事は数ヶ月前から始まっていたのかもしれない。

近衛隊、そう古めかしく呼ばれているが、いわゆるシークレット・サービスというものだ。

もしくはセキュリティーポリス。

特別編成の国王直属の部隊だ。

もちろん各部署の選りすぐりのエリートのみで構成され、国王の護衛や秘書的な役割を担っている。

そんな特別な組織に属しているが、ノアは元々陸軍将校、少佐であ

る。

近衛隊長であつても軍部の一員として、時に特命に従事しなければならない。

近衛隊に特別派遣されている隊員に特命が下されるなど、滅多なことではありえない。

しかし、国境での内紛が国境を接する他国との関係悪化を招く恐れがあり、3ヶ月ほど前に急遽派遣が決定されたのだ。

正式な軍隊とは行動を別にし、内紛を計画したレジスタンスの指導者達の動向監視や銃器の闇取引等の情報を掴むために尽力していたのだが、その最中陛下から件の手紙が届いた。

『助けてくれ』

ただ、そのみが書かれた手紙に、ノアはどれほど特命を忘れ、陛下のいる王都に戻りたいと思つたことが。

しかし緊迫した戦情がそれを許さず、内紛を治めて戻ってくるのに1ヶ月もかかつてしまった。

やっと戦場から帰還し、一にも二にも大事な陛下に会うために、ノアは戦場からその足で王宮にやつて来た。

陛下のお心を曇らせる問題とはなんだろう。

道中、ノアの不安は増すばかりだったが、王宮に着き、肩透かしを食らわされた。

想像ばかりが膨らみすぎたのかもしれないが、それにしても政治の中心である中央の王宮は異様なほど落ち着いていた。

ただ、その中心にいるべき国王陛下の姿が見えないだけ。

それ以外は日々と変わらず、全てが動いている。

（手紙の意図は政治とは無関係なのか？）

そう思い、せかせか働く役人達に声をかけ陛下のことを聞くと、何故だか皆一様に目線を反らして一言呟く。

「お元気でいらっしやいます」と。

その異様なほど同じ返答ばかりを受け、ノアは奇妙な気分させられた。

（もしか御身になにか……）

不安に胸が締め付けられるが、ノアはいいや、そんなことはないと自分に言い聞かせて被りを振った。

（陛下に何かあればもつと城が騒然としているはず。皆、何も変わらなかったじゃないか）

と考えるも、一様に目線を反らすあの態度が気にならない訳ではない。

だが、ノアは自分に言い聞かせるように呟いた。

「あれはちよつとばかり困られた陛下の気の迷い。もう1ヶ月も経つのだ。きっと解決されているはず」

現にあれ以降手紙は一通も届いていない。

だから、皆の異様な態度も虫の知らせのように高鳴る鼓動も全て杞憂だ。

ノアは大きく頷くと、目の前にある重厚な国王の執務室の扉をノックし、丁重に押し開けた。

「失礼致します、陛下。ノアでございます。帰還のご挨拶に参りま

……」

軍人らしく恭しく敬礼をしたノアはその光景に目を見張り、硬直した。

扉の向こう、広い執務室の真ん中、そこに置かれた大きな執務机の前にいたのは人外魔境な美しいメイド服の女とまるまる太った子豚のような男。

しかもメイドは子豚を足蹴にしている。

ノアの被っていた帽子がパサリと毛長の絨毯に落ちた。

「へ、へえか？」

見るも無残な体型に変化し、精悍な時の面影など微塵にも残っていないが、忠臣のノアだからこそ直感で気付いたのかもしれない。

（もしかしくともあれば、カンナリオ王国の第15代国王、エマシユオン国王陛下……。温厚で、誠実で、ついでに体格はすらっとした八頭身だった、あの……）

ノアの頭はホワイトアウト状態。

何も頭に入ってこない。

そんな彼を他所に目の前の二人は独自の世界を広げている。ぶつくりと膨らんだ顔を嬉しそうに崩し、たぶん陛下だと思われる子豚の男は自分を足蹴にしている女を恍惚とした表情で見上げた。

「もっと僕を蔑んでください、女王様」

「じよ、女王様？」

ノアは絶叫が執務室にこたえました。

そのメイド、キケンにつき

ノアが最初に捉えたのは、目映いばかりに均整の取れた素晴らしいプロポーションだった。

やたらに胸元の開いたメイド服からはちきれそうなほど豊かなバストが見え、異様なほど丈の短いスカートはきゅっと上がったヒップでひらりと膨らみ、その下にはすらっとした長い脚が伸びている。足先をエレガントに演出するピンヒールがたとえ子豚のような男を踏みつけていても、何一つ彼女の魅力を損なうことはなく、むしろ清々しく感じてしまうほどだ。

思いもしない存在にノアはしばし目の前の美女を見つめた。

この恐ろしいまでの美しさをどう表現したらいいのだろう。

人外魔境な美女は何故、際どいメイド服（私物。王宮メイドは恐ろしく丈の長いスカートを穿いている）姿でSMの女王様よろしく子豚のような男を踏みつけているのだろうか。

自分は来る場所を間違えたのか、いやいや、城内にはSM嬢のいる部屋など存在しない。

（ここは陛下の執務室だよな？）

自分に問い返すも自信が持てない。

扉の前に立ちすくんだまま、ノアは動きの鈍い頭を懸命に働かせるが、冷静な考えが思いつかない。

（内紛の激務がたたったか？陛下の執務室で白昼夢を見るなんて…陛下の執務し…）

そこでノアははたと気が付いた。

（陛下はどこに行ったんだ）

今の今まで、その大切な存在を忘れている方が驚きだが、異様な光景に度肝を抜かれたのだ。

仕方ない。

こんなＳＭプレイを見学するよりも陛下を探す方が先だ。

そう自分に言い聞かせ、ノアは部屋を見渡した。

常と変わらない執務室。

いつもと違うのは真ん中にいる男女だけ……いや、彼の鋭い観察眼は無意識のうちにある事実を捉えた。

「……ん？」

気のせいか。

いやいや、見間違えるはずはない。

視界の端に捉えたものに引っかかりを覚え、ノアは再度そちらに目を向けた。

向けた瞬間にその目が最大限に開かれる。

その驚愕の事実には絶句せずにはいられない。

「へえか？」

そう呟いたが信じられない。

御齡35歳と男ぶりに磨きがかかる、精悍でスマートな国王の姿からはまるで想像もつかないが、目の前で足蹴にされているでかい男の円らな目を見るにつけ、間違いない事実であると気付かされる。八頭身のバランスの取れた体格はまるで風船のように丸く膨らみ、顔も面白いほどパンパンになっている。

THE KUISINBOU!

そう表現するのが一番の姿である。

これはこれで、街にいれば誰からも愛されお菓子を貰えるゆるキャラになれそうだが、国王にそんなキャラ設定はいらない。

ああ、気付きたくなかった。

いや、信じたくない。

ノアは己の感覚と葛藤を繰り広げたが、しかし、じっくりと見るにつけ、直感確信に変わる。

その推定国王陛下は恍惚とした瞳で美女を見上げると、問題発言をした。

国王の癖に、あろうことか美女を女王様と呼んだのだ。

「じよ、女王様〜?」

思わず絶叫を上げたノアに気付いたその美女は、不機嫌そうに柳眉を寄せた。

「何か、用?」

真っ赤な唇から紡がれる言葉は、痺れるほどに色っぽい。

ウェーブのかかった長い金髪を無造作に払う仕草も、アンニユイにノアの方に向き直る様子も頭の上から爪の先まで洗練され、艶やかだ。

そこに下卑たいやらしさは一切なく、息を飲むほどに高潔な色気が漂っている。

扉の前で驚愕してるノアに目を向けた美女は、長いまつげに彩られた瞳を意味ありげに細めた。

はつと自分を取り戻したノアは受けとめるべき現実にも目を向け、美女をにらみつけた。

「お、お前……へ、陛下になんていうことを……」

ノアの顔から血の気が引き、怒りで手が震えた。

事もあるうに国王陛下を足蹴にするなど、これ以上の不敬があつていいものか。

飛び掛らんばかりの勢いで部屋に駆け入るとノアは美女に向かって叫んだ。

「貴様、陛下に何をしている！即刻その脚を除ける！！」

「何って？教育してあげているのよ？」

美女はさも当たり前のように答えると、足下で控える子豚の陛下になつと笑いかける。

その大輪の薔薇が咲き誇ったかのような美しさに、子豚陛下は顔を真っ赤にし、ない首をフル稼働にして大きく頷いた。

突き飛ばすように美女を押しのと、ノアは床に這いつくばった陛下を起こそうと肉に包まれた背に手を添えた。

立つようにそつと促すと、陛下は顔を硬くし、ゆつくりと頷いてノアに従った。

その横では邪険に扱われ美女が不機嫌そうに顔をしかめたが、何も言わずに二人のやり取りを見つめている。

「何があつたのですか？陛下！」

立ち上がった子豚の陛下の肩をがしりと掴み、ノアは一番の疑問を

口にした。

動揺のためか、詰問するように語気が強くなるのを抑えることができない。

しかし、子豚の陛下はそつと視線反らし、答えようとしない。

あまりの変わりようにノアは涙を流さずにはいらなかった。

あの潑刺とした姿が今では夢のよう、肉に包まれた陛下は気まずげにノアから視線を反らす。

いくら問い詰めても、子豚の陛下はすまないとばかり呟くばかり。

これでは埒があかないと、ノアはその矛先を美女に向けた。

美女はまるで青春ドラマの一場面のような2人の熱いのやり取りを遠巻きに、面白げに見つめていたが、ノアが鋭く睨みつけると、それを軽く受け流すように色っぽく微笑んだ。

「貴様、何者だ？陛下の御身に何をした！」

きつく問い詰めるように言い放つが、その迫力の籠った軍人らしい威厳も美女の前では何の意味ももたなかった。

美女はノアの威圧など物ともせず、愛らしく小首を傾げて一歩前に進むと、見えそうで見えない長さのスカートの裾をついと掴んでみせた。

ノアは不快げに眉を寄せる。

（なんだ？何を仕掛けるつもりだ？）

身を硬くし美女の出方を待つノアの前で、彼女は長い脚を折り、まるで貴婦人のそののように流麗に頭を下げた。

「ワタシはダダリア。半月ほど前から国王陛下専属のメイドをしていますの」

ゆっくりと頭を上げると、ダダリアと名乗った美女は真っ赤な唇を妖しく上げて見せた。

「貴方の陛下、とっても優秀よ？ワタシも教えがいがあるわ」

「優秀？何の話だ！陛下専属のメイドが何故、陛下を足蹴にしている！」

動揺し、未だに事態を掴みきれない。

ダダリアの言葉の意味を図りかね、ノアは声を上擦らせた。

ダダリアと陛下を交互に見つめ答えを探すが、子豚の陛下は俯いて視線をさけ、ダダリアは意味ありげに微笑むばかり。

困惑するノアをよそに、ダダリアは小さく呟いた。

「喉、渴いちゃった」

「はあ？」

「すぐに用意します！女王様！！」

訳が分からず、顔をしかめたノアの側で、今の今まで息を殺して俯いていた子豚の陛下が水を得た魚のようにピンツと飛び跳ねると、ぼてぼてと扉の外に駆けて行った。

その体型からは想像もつかないほどの素早さに、ノアは呆氣にとられて思わず見送ってしまった。

「へいか……」

呆然とその背を見つめるノアの頭に先ほどのダダリアの言葉が響く。

（優秀って…。教えがいつて……）

その背を見つめるノアにダダリアは追い討ちをかけるように囁いた。

「ねっ、とっても優秀でしょ？」

そのメイド、キケンにつき その2

「ゆ、優秀って……」

若干嬉しそうな顔で駆けていった陛下が消えた扉を呆然と見つめたまま、ノアは絞り出すように呟いた。

ダダリアに対しての問い、というよりも自分への確認作業だったのかもしれない。

少しでも客観的に事態を把握しようと努めるも、ショックのあまり頭が思うように動かない。

後を追うことも出来ず、立ち往生しているノアに、妖しい美女ダダリアは不敵に微笑んでノアの自問自答に答えを与えた。

「つまりご奉仕の才能がありということよ。もしくは、蔑まれることに快感を覚えていらっしゃる、とも言えるわね」

「か、快感……」

ダダリアの言葉がノアを更に追い込む。

ずんつと重たい衝撃が彼の上にのしかかった。

「新境地を開かれたのよ。うふつ、これで陛下の人間としての幅も広がるわね！」

そんな新境地、国王が開く必要はないだろう。

むしろ人間としての格が大幅に下がったのではないだろうか。まざまざと見せ付けられる現実にはノアの顔面は蒼白していく。

「ま、まさか御身にこのようなことが……」

絶望とはまさにこのこと。

命を懸けて仕えてきた主君のあまりの変貌ぶりは、忠臣の彼にとつて血を流すよりも辛いことであつた。

「そういう態度が彼を追い込んだとも言えるわね」

ショックに打ちひしがれるノアを他所にダダリアはポツリと呟いた。呆然とし、何故陛下の側を離れたのかと後悔の念に駆られていたノアだが、耳ざとくダダリアの言葉を聞きとがめると厳しい視線を向けた。

「ん、どういう意味だ？」

「あら？意外に冷静じゃない。もっとショックを受けて引きこもるのかと思っていたわ。貴方が一番の忠臣だって聞いてたから」

ダダリアは楽しそうに手を打って見せると、側にある国王陛下の大きな執務机の上に軽々と乗り上げた。

そしてその長い脚をゆったりと組んで見せる。

黒檀でしつらえた一級品の豪華な執務机がたちまち女王様の椅子に変わった。

さも自分の物のようにくつろぐと、ダダリアはノアに向かって長い脚をピンっと伸ばした。

「ねえ、聞きたいことが色々あるんじゃないの？折角人払いしてあげたのよ？」

国王陛下の執務室なのに、払われてしまった陛下に同情は禁じえないが、今のノアにはそんな細かいことを気にする余裕はなかった。

すうつと大きく息を吸うと、全身に力を入れ、事態を面白そうに見つめるダダリアを睨む。

「お前の目的はなんだ？何故、陛下はあのように変わられた？」

威圧するように低く言い放つと、ノアはダダリアの動向を見守った。ダダリアの行動は、不敬罪の確固たるものだ。

この場で即刻とり押さえても差し付けない。

しかし、今ここでこの女を牢獄に送れば、ノアの知りたいこの状況の全貌が永遠に失われてしまうに思えた。静かにノアはダダリアの出方を待つ。

助けてくれ、そう書かれた手紙の真実。

一様に視線を反らし、お元気ですと言う役人達。

何故か丸々と太った陛下。

何故か足蹴にされ喜ぶ陛下。

その答えはすべてダダリアが握っているようにノアには思えたのだ。

「あらあら。そんなに睨んじゃ嫌よ、近衛隊長さん！」

ダダリアはノアをからかうように大げさに肩を竦めて見せると、伸ばした足をノアの顎下に持っていった。

短いスカートから伸びる足が際どい位置まで上がる。

しかし、そんな挑発にもノアは応じず、ただじつとダダリアを睨みつけていた。

二人の視線がまるで火花を散らすように絡みあう。

沈黙が深まるにつれ、緊張は深まる。

しかし、二人は視線を反らさずにお互いを捉える。

しゃべった方が負け。

そんな空気を破ったのは、能天気な子豚陛下の声だった。

「ダダリア！お茶を持ってきたよ！」

目を輝かせ、子豚が駆けてくる。

ぜいぜいと息を切らせながら、ダダリアの前まで来ると子豚陛下は、ノアなど存在しないかのようにダダリアに向かって恭しくティーセットを差し出した。

褒めて、とばかりに円らな瞳をダダリアに向けるその姿はまるでご主人様のご褒美を待ちわびる飼い豚……いや飼い犬のようだ。

そんな陛下にダダリアはにこりと微笑んでみせた。

「まあ茶菓子まで用意して。よく気が回ったわね」

銀のトレイの上に乗せられたティーセットの他にクッキーが上品に飾られている。

「やれば出来るじゃない」

ダダリアから思わぬ賛辞を受け、子豚陛下は嬉しそうに頭を掻いた。その姿にノアは硬直せずにいられない。

（陛下、本当に変わられてしまったのですか……。それともこの女に変な薬でも飲まされたのか？）

ノアは心の中で絶叫を上げたが、そこは腐っても近衛隊長。顔には先ほどまでと同じ緊張感が漂っている。

「で・も、少しばかり時間がかかりすぎじゃない？」

ダダリアの声のトーンが一気に下がった。

それに合わせて子豚陛下は脅えたように身を縮める。

「そ、それはお茶請けを探してて……」

「言い訳する子は嫌いよ？」

「ごめんよ、ダダリア。でも……」

そう言いつくろいながら、陛下はノアの方に視線を向ける。

こんな情けない姿を見られても尚、ノアには威厳ある陛下でいたかったのも知れない。

しかしダダリアはそんな陛下の思惑すら無視して無情に言い渡す。

「あら？謝り方は教えたはずでしょ？」

ダダリアは意味ありげ瞳を細めると、艶やか微笑んだ。

「で、でも……」

「いい機会じゃない。近衛隊長さんに今までの練習の成果を見てもらわなきゃー！」

そのメイド、キケンにつき その3

「ねえ、は・や・く！」

困惑した表情で陛下を見つめるノアに子豚陛下は戸惑うように視線を漂わせた。

一の家臣を前に、君主としてのプライドが邪魔するのか、なかなか踏ん切りがつかないでいる。

だがただ一人事態を楽しんでいるダダリアが簡単に諦めるはずがない。

「へーか？教えて上げでしょ？せっかくの勉強の成果を近衛隊長にお見せしなきゃ！！」

机に腰掛けたまま、歌うように絶対的な命令を下す女王陛下に、子豚の陛下もなす術もない。

「も、申し訳ありません、女王様。ぼ、僕はクズでノロマな豚です！」

早口でそうまくし立てると子豚陛下は執務机の前、つまりはダダリアの足元に跪いた。

「こんなダメな僕に、どうかお仕置きを！」

「お仕置き！？」

思いもしない科白の応酬にノアは茫然自失。

強要されているとはいえ、陛下自身の意思の上に発せられた言葉に

これ以上ないショックを受けた。

が、しかし、彼の忠誠心はこんなことでは揺るがない。

「陛下！目を覚まして下さい！こんなメイドに頭を下げる必要などありません。何か弱みでも握られているのですか！」

床にひれ伏した陛下に駆け寄ると、ノアはその身を起こした。困惑の表情を浮かべる陛下に構わず、その手をぎゅっと握る。

「おいたわしや、陛下。私が側を離れたばかりにこのような事態を招いてしまったとは……どれだけ謝っても済む問題ではありません。ですが、今一度、私を信じていただけるのなら、陛下をこのような状況に追い込んだ全てを私が取り除きます」

そう言つて、執務机に腰掛けて長い脚をぶらぶらさせているダダリアを睨み上げた。

「手始めにこの女を取り押さえますようか？」

「ノア、君の気持ちは嬉しいよ。このように私が変わっても変わらず接してくれる」

今にもダダリアに噛みつかんばかりのノアを押さえるように子豚陛下はぎこちなく微笑んでみせた。

どれほど面影が変わってもその柔らかな笑みは昔のままだ。

「陛下、何に遠慮なさっているのです？今すぐにでもこの女を牢獄に……」

「そ、それはダメだ！囚われのダダリアの見てみたい。だが、それ

とこれとはまた違う話で……」

ノアの言葉に弾かれたように顔を上げた子豚陛下は何故だか興奮ぎみにノアの言葉を遮った。

「囚われのダダリアを見てどうするんです？ 見たい見たくないの問題ではなくて、これは陛下への不敬罪として逮捕拘留は正式な手続きで……」

子豚陛下の言葉の意味を図りかね、ノアは不思議そうに首を傾げた。陛下は牢獄に入れると言った言葉の意味を理解できていないのだろうか。

そう思っただけで説明をしようとした時――。

ノアは頭上から思いもしない攻撃を受けた。

咄嗟に陛下を守ろうと身を捻ったが、流石のノアも不意打ちの上に座っただけでは分が悪い。

しかも相手も相当の手管で、ノアが殺気を感じ上を見上げた瞬間にはもうノアの頭上にいた。

次の瞬間にはノアは上から押し倒されていた。

床に沈む体が衝撃に備えて強張る。

倒れる前になんとか体勢を立て直そうとノアは試みたが、目の前にどんつと現れたそれに思わず頓狂な声をあげてしまった。

「うわっ！」

豊満な胸を包むメイド服の襟元から見える深い渓谷。

白い肌と黒いメイド服のコントラストが目には焼きつき、体勢を立て直すつもりがそれに気を取られてあえなく失敗してしまった。

いくら毛長の絨毯とはいえ、ぶつかれば痛いものは痛い。

痛みにノアが顔をしかめた時には全てが終わっていた。

攻撃を仕掛け、押し倒した張本人、全ての元凶であるダダリアは倒れたノアの上に無断で乗り上げるとノアをじっと見つめている。

ダダリアの胸元を流れる美しい金髪がノアの肩にかかる。

真つ赤な唇から漏れる吐息がノアの短い髪を揺らす。

薄紫の魅惑の瞳が妖しげな光を湛え、ノアを捉えて離さない。

その吸い込まれそうな瞳に、白い肌に、柔らかな体に我を忘れそうになる。

だが、そんなことで怯んでいては近衛隊長は務まらない。

押し倒されてから数秒もたたぬ間にノアは冷静に状況を把握し、反撃に出ようと身を起こそうとした。

が、それよりも先にダダリアが行動に出た。

ノアの制服のネクタイを掴むとぐいっと掴むと更に自分の方に引っ張る。

ダダリアの専制攻撃をともに受け、ノアはまるで首輪をつかまれた犬のように否応なくダダリアの方に顔を向ける。

「な、何をする！離せ！！」

動揺を隠せず、ノアは大声で叫んだが、ダダリアは聞く耳持たず。じっとノアを見つめてくる。

その横では子豚陛下が羨ましそうに指をくわえて二人を見つめていた。

ノアはダダリアを押しつけようとするが、動けば動くほどダダリアは顔を近づけてくる。

その透き通った深い瞳は吸い込まれそうなほど妖しく、美しく、変な気分にさせられる。

思わずダダリアから視線を反らす、ダダリアはそれを許さない。

ぐいつとネクタイを引き自分の方に視線を戻させる。

「いい加減にしろ！何がしたいんだ！お前は！！」

ダダリアの豊かな胸から、細い首筋から、真っ赤な唇から、その全てから逃げるようにノアは叫んだ。

ダダリアの意図するところが、ノアには何一つ見当もつかない。

新手のテロか、それとも国家を脅かす陰謀だろうか……。

近衛隊長として、いや、一軍人、一家臣として危惧されるべき事態を想像してみるが、その全てからダダリアはかけ離れて見える。では、この女の意図はどこにあるんだ？

陛下をSMの世界に導くことか？

ノアが身を硬くして、ダダリアの出方を待った。

だが、意外にあっけなく首の拘束が解かれた。

パリリとネクタイを離すとダダリアは肩にかかった髪を払った。

「なあんだ、つまんない男」

「へえ？」

ダダリアは興味なさげに立ち上がった。

握られてしわができたネクタイがノアの乱れた制服の上で緩やかに揺れている。

事態を把握しきれないノアは情けない顔を隠せないまま、立ち上がることもできない。

（つまんない男って、なんだ？）

しかし、ダダリアはノアに背を向け、やるせないとばかりに一人ぶ

つぶつ呟いている。

「ただのお子様か、はたまたスーパーノーマル属性の人間なのか。このワタシを見ても何も感じないなんて。……しかもこの様子じゃあれも覚えていないわね」

若干不機嫌そうに眉を寄せるダダリアだったが、小さくため息を吐くと身軽に執務机の上に座った。

長い脚を大胆に振り上げて組んで見せると、自分に言い聞かせるように呟く。

が、すぐに意味ありげに口の端を上げた。

「まあ、そうこなきゃ楽しくないわ」

ノアは答えを探すようにダダリアの方を見上げた。

薄紫色の妖しい魅力の瞳とノアの透き通った蒼い瞳が火花を散らすように鋭くぶつかる。

敵意をむき出しのノアにダダリアは麗しく笑ってみせた。

「そついう訳だから、これからよろしくね！ご主人様？」

メイド様のアブない魔力？

「いやいやいや……」

ノアは頭を振った。

零れでるのはため息ばかり。

真面目で冷静、実直、仕事が出来ると評判の近衛隊長であつてもどうしようもできないことはある。

（何がそういう訳だ）

先ほどまるで女王陛下のように宣告された言葉の意味が分らず、それ以上に陛下があそこまで変化した要因にも想像がつかず、ついでに何故だかダダリアを庇いたてる陛下の態度に心底失望せざるを得ないノアは一人苦悩していた。

『内紛の鎮圧で疲れているだろうから、今日はもう休みなさい』と声をかけた陛下の意図は火を見るより明らかだ。

口調は優しいがノアに何も聞いてくれるなど言いたげだった。

陛下に従うしかできず、にやにやと笑うダダリアの笑みに腹立たしさを感じつつも執務室を後にしてきたのが数刻前。

ノアは今、国王陛下の執務室の側にある近衛隊の待機室の中で近衛隊長の執務室として簡易に仕切られているスペースで、自分の執務机に腰掛けていた。

こなさなければならぬ仕事が溜まりに溜まっている。

だが、今はそれを処理しようという気にはなれなかった。

長期間の特命の疲れが出たのかもしれない。

しかしそれ以上に先ほどのやり取りが彼の心に響いている。

「本当に何があつたのか……」

彼がそう呟いた時、近衛隊待機室の扉が開く音がした。

「マジ、ハンパネエーなー、ダダリア様の美しさは」

「オレ、近衛隊やめてダダリア様の下僕になろっかな」

「そしたら陛下と同僚じゃん！」

「すっげー、オレ大出世！」

楽しみに話しながら会話を続ける彼らはノアが存在には気付いていない様子で、待機室の真ん中に置かれたソファに腰掛ける。

ノアは惹かれるように薄い仕切り板に耳を押し当て、二人の会話に聞き耳を立てた。

「そついや国境での内紛は昨日の夜に鎮圧されたんだろ？じゃあ隊長ももうじき復帰だな」

「いやいや、あの人のことだ。もう陛下に会いにそこまで来てるかもよ」

「それはないって！どんだけ仕事熱心。ちょっとひくわー！」

そう言つて二人は大声で笑つた。

確かにこの部屋は防音設備も充実していて外に音が漏れることはないが、彼らの敵が内側にいるとは露にも気付いていない。

部下の近衛隊員に引かれた近衛隊長は怒りでこめかみに青筋立っていたが、しかしそこは仕事の出来る男。

冷静に感情を抑えると情報収集に徹する。

「あの陛下至上主義の隊長がダダリア様を見たらどうなっかな？」

「案外、ああいう女王様タイプの女性に弱かったりして」

「ありえる。ああいう真面目一本ってのが、意外に危ないんだぜ！」

「『いじめてください、女王様』とか言っちゃう訳？マジ見てみてえ〜！」

「ほう、その前にお前が生きていればいいがな」

「「え……」」

背後から聞こえた、押し殺したように低い声に会話に夢中になっていた近衛隊の二人はびくりと身を竦ました。

まるで金縛りにあったように動けずにいる二人はその聞き覚えのある声に恐怖を感じながら、そつと顔だけを声のするほうに向けた。

ソファの後ろ、隊長室との仕切りの壁に身を預けてこちらを見ている近衛隊長は、いつもと変わらない冷静な表情である。

しかし、その背後にうごめく負のオーラに彼らはノアの怒りが頂点に来ていることを悟った。

「ひい！」

許しを請うことも、この場から逃げ出すこともできず、二人の哀れな隊員たちはその場に硬直した。

ゆっくりと歩を進めるノアに、戦慄の走る隊員たち。

「すみません！隊長！！」

泣き叫ぶ二人は飛び上がりばかりの勢いでソファから立ち上がり、とノアの足元に縋った。

各部署のエリートで構成されたはずの近衛隊員がおいおいと泣きながら、ノアに許しを請う。

「二度と陛下と同僚なんて言いませんから！」

「二度とダダリア様の下僕になりたいなんて言いませんから！」

「謝るポイントが違う！！いや、それも問題だが、もつと他にあるだろ！！」

ノアは怒りを忘れ、二人の謝罪に突っ込みを入れた。

部下に仕事熱心さで引かれて、SMプレイが似合うと言われた可哀想な隊長は足元で涙を流す情けない部下を見下ろしたため息をついた。

「もういい。今度から馬鹿話をするときは状況をよく見るんだな。」

今回は執務室に俺しかいなかったが、他の者に盗み聞きされる可能性もある。お前達は栄えある近衛隊に選ばれたんだ。それくらい自覚しろ」

「はっ。申し訳ありません」

二人は素早く立ち上がるとノアに対して敬礼してみせた。

ノアはもういいとばかりに片手を挙げ軽く振ると、先ほどまで二人がかけていたソファに腰を下した。

そのノアの態度を“陰口は不問に処す”と捉えた二人は、そのできた上司の態度に今度は感涙した。

「サーセン！仕事バカの、陛下バカの隊長だと思っていました！」

「隊長！正直、真面目で冷静すぎて面白くない隊長だとばかり思っていました！」

「おい！」

「でも、さすが隊長です！一生ついて行くツス！」

二人は自分が失礼な物言いをしているなどまったく気付かず、ノアに駆け寄った。

「ふざけんな！お前らみたいなのについて来られたら迷惑だ！」

二人を追い払うように、ノアは手で押しのけたが、そんなことでへこたれる近衛隊員ではない。

日々厳しい隊長からの訓練を受け、打たれ強さはぴか一だ。

近衛隊の任期を終えれば、それぞれの部署に帰る事実を忘れ、ノアに一生ついていくと宣言している。

「いい加減に！しろ！」

流石のノアも最後は暴力に訴え、二人の頭には特大のたんこぶができる。

それでもついていくツスと言っているのだから、この二人は相当のものだ。

（エリート集団って言われているのに、蓋をあければこんな奴ばっか）

隊長を辞めたいと思わずにいられないノアであつたが、しかし、今は近衛隊の編成問題よりも気になることがある。
ノアはため息を一つ吐くと、二人に向き直つた。

「俺がいない間に何があつたんだ？」

メイド様のアブない魔力？その2

「それは急に始まったんツスよ」

そう敵かに言ったのは、海軍から派遣されている近衛隊員のアンデイー・マツクリン。

薄茶色のくせつ毛と大きな瞳がまるで猫のように見えるが、可愛いのは顔だけ。

186センチとノアと変わらない身長だが、その筋肉質の肉体は流石は海の男と賞賛を送りたくなるほどだ。

その横にいるボビー・ダグラスは、体格、身長はアンディーに劣るが、しかし、銃器の扱いにはノアも一目置いている、市警の警察官だ。

警察官の癖に、法律よりも銃器のことばかり勉強していたらしい。

「それって？」

待機室のソファに腰掛け、ノアは二人の話に耳を傾けていた。

「陛下の巨大化ツス！」

「巨大化って…他に言い方なかったのか？」

ノアは引きつった苦笑を浮かべたが、二人はポカンとしている。

確かに陛下に対してデブなど言える訳はないが、まるで突然変異のように表現するのもどうだろう。

しかしいい言葉も思いつかないし、それに難しく表現してもこの二人には伝わらないように感じて、ノアは何も言わず先を促した。

「隊長が国境の方の内紛を治めに行かれたのが3ヶ月前。初めの1ヶ月は何事もなく、うるさい上司もないし、皆で楽しくやってたんツスよ。陛下もテンションアゲアゲでね。皆で盛り上がっていうぜーみたいな。でもね、2ヶ月目の半分を過ぎた辺りで急に、陛下がその膨らみ始めたんツスよ。もうマジイキナリツスよ！」

話しているうちに乗ってきたのか、アンディーの言葉に熱が入りだした。

突っ込みどころ満載なのに、ボビーもそうそうと同調し、止めることをしない。

（俺、部下から見放されてるのかな）

ノアは一人なんとも言えない疎外感を感じた。

「そっからはもう、大騒ぎツスよ！大臣とか偉い人が出てきちゃって、やれカンコウレイだ、ジョウホウトウセイだとか騒いじやってオレら近衛隊員も一部を残して、王宮護衛騎士団に一時派遣されて陛下に近づけるのは一部の人間だけになったんスよ。ちなみにオレが陛下が膨らんだのを最初に気付いて、近衛連隊長に報告に行ったんツス！」

褒めて、とばかりに目を輝かしてくるアンディーに、ノアは現金な奴だと思いつつも、よくやったと声をかけた。

それにしても近衛連隊長に対してもこんな口調で報告に行ったのだろうか。

そう考えると頭痛がしてくる。

ただでさえ、こんなどうしようもない奴なのに、緊急事態で焦っていたとなると、たぶん連隊長は新手の外国語を聞かされてる気分だったろう。

近衛連隊長は御齡56歳の温厚な人である。

ノアやアンディー達とは違い、陛下や王族の身の回りのことを管轄する宮侍職の役人としてその長い人生を生きてきた、根っからの文人。

ついでに言えば伯爵号も持っている、雲の上の人物である。

近衛隊はそれぞれの王族に一つ存在し、それぞれの護衛やスケジュール管理等を行っており、それを総合的に管理するのが連隊長の仕事である。

例えばノアが抜けていた場所に違う部署から人を配置したり、大々的な護衛が必要な場合他の部署と掛け合って人数を増やしたりと、警護に支障がでないように複合的にバックアップしてくれるのだ。

（後で謝りにいこう）

そう心に決めたノアの側ではアンディーが誇らしげにしている。

嬉しそうにしているアンディーが羨ましかったのか、我も我もとボビーが自分の手柄を話し出す。

「人間急に膨らむものじゃないッスよ！それに気付いて俺はアンディーが報告に行っている間に陛下から昨日口にされたものを全て聞き出してリストアップしたんッス！」

「お！それは流石だな。やっぱり市警の警察官だ。洞察力が違う。それで、そのリストアップに不審なものはあったのか？」

ボビーの言葉にノアは体を乗り出したが、それに合わせるようにボビーは顔色を変え、視線を反らした。

「あ、いや、あの後すげーごたごたして、リストアップしたのを忘

れてて、まだ誰にも渡してないッス」

「っんのボケが……」

「ひっ!!」

ノアの押し殺した本音にボビーはもちろんアンディーも震え上がる。
ノアの蒼い瞳が鈍く輝く。

二人はその輝きに死神の足音を感じ、死期を悟った。
だが。

「それで？」

二人の想像とは違い、我慢強い隊長は部下を地獄に叩き落すようなことはしなかった。

彼の知りたいことはまだ何一つ分かっていない。
太った原因。

ダダリアの存在。

それらが導く先にある陰謀。

「それでって、これで終いッス」

先を促したノアにボビーが戸惑うように答えた。

まだノアがいなくなつて1ヶ月半しか過ぎていないのに、もう話の
ネタは尽きたらしい。

「はあ？ 終わりのな訳あるか！ まだ始まつたばかりだろ？ 陛下が太
つた原因は？ 毒か？ 病気か？ あの女の正体は？ 陛下がああなって、
政治的に変わったことは？」

「ちょ、そんな一気に言われてもオレ、覚えられませんよ！そ、それにオレらは陛下が巨大化してから、ほぼ毎日この待機室にいてぼくとするか、トレーニングルームでぼくとするかのどっちかだったんツスよ！情報を漏らしちゃいけないからって、外にも出してもらえないし！」

なるほど。

アンディーらは陛下の護衛というよりも情報を漏らさないようにここに閉じ込められていると言った方が正しいのかもしれない。そう考えれば彼らの話はここで終わりだろう。多分何も聞かされていないのだ。

「ほんとと、最悪ツスよ。何の楽しみもない」

「まあダダリア様に会えるだけ、よしとしなきゃな！」

二人は不貞腐れたように愚痴を言い合っていたが、そのフレーズをノアは聞き逃さなかった。

「おい、ダダリアってのは何者だ？」

メイド様のアブナイ魔力？その3

「ダダリア様は陛下付きのメイドス」

「知ってる。さっき本人に聞いたからな」

ノアがそう答えるとアンディーはがっくりと肩を落とした。

「すげーや、隊長。昨日鎮圧が終わったのに、もうここまで情報を得ているなんて。国境の町からここまで車でまる1日以上かかるのに……」

「ホント、マジパネッス！あそこはまだ電話線も引かれてないんでしょ？どうやって陛下の危機を察知したんッスか？勘ッスか？やっぱり隊長は違うわ」

昨日の夜7時、レジスタンスのリーダーを確保、9時には無許可で銃器の売買を行っていた地元有力者を逮捕し、ノアが後の処理と書類作成を終えたのが、朝の4時。

そこから一人車を飛ばして王都に戻ってきたのだ。

1日かかる距離を半日に押さえたのは、もちろん内緒。

時間のつじつま合わせを話せば、後で色々ややこしくなるからだ。

「ホント何でも知ってるな、隊長は。もうオレらの話すことなんてないッスよ。ジョウホウトウセイのために今まで仕えていたメイドは皆陛下から外されて、その代わりに来たとか。今陛下の世話は全てダダリア様に一任されているとか。ダダリア様には上の人も頭が上がるらないとか。ダダリア様の魅力はほんとハンパネーとか……隊長はもう知ってらっしゃるんでしょうね」

ボビーがため息混じりに呟いたが、それをノアは聞きとがめた。
ボビーの肩を掴むと体を持ち出す。

「待て待て。知らない。もっと詳しく教える！」

その必死な態度にボビーは何かを感じたらしく、顔をにやつかせた。

「は、はくん、隊長、隊長も男だったんですね。女の子の店に誘っても乗ってこないから、そういうの興味ないのかと思ってましたけど、こりゃ大物ねらいッスね」

「おい、ボビー、そりゃどういう意味だ？」

「バカヤロ、隊長はダダリア様が気になって仕方ないってことだよ！」

まだ話の流れをつかみきれしていないアンディーを他所にボビーは一人したり顔である。

ノアはもう、突っ込みをいれるのもしんどくなってきて、大きくため息を吐いた。

しかしこのまま脱線しまくっていては何一つ情報を得られない。

そう自分に言い聞かすと疲れた体にむち打って、もう一度二人の頭に拳骨を落とした。

ガインっという音が部屋に響く。

本当に頭の中は空っぽなのかもしれない。

「サーセン。隊長」

「以後話の腰は折るな。それで、ダダリアというのは、元々どこに

所属するメイドだったんだ？」

二人はノアの足元にきっちり正座をさせられ、そしてノアの質問してることだけに忠実に答えるようにルールの変更がなされた。

（初めから、こうすればよかった）

ソファに座ったまま、鋭く二人を睨みつけるとノアはボビーに質問した。

「知りません」

「ほう、もう一発お望みか？」

ノアはこれ見よがしに拳を鳴らしてみせた。

その姿は二人は焦り、必死にノアを止めようと口を開いた。

「ほんとと、急に来たんツス。それまでメイドの仕事もオレらがしてたんツス。ご飯運んだり、掃除したり、それが半月前に急に執務室にダダリア様が現れて、驚く連隊長に対して、今日からワタシが陛下のご奉仕を致しますわって宣言したんツス。いやゝあれは今思い出しても絵になる光景ツスわゝ。って、サーセン。もう無駄口は叩きませんから拳を下して下さい！…それでね、初めは上の連中も渋ってたんツス。内務大臣とか無関係な者を中に入れるなとか、関係ないオレらに逆ギレしてくるし、でもそれも全て、ダダリア様の目を見るまで！ダダリア様のあの目を見た瞬間から皆ダダリア様の虜ツスよ！」

興奮した様子のボビーは更に話を脱線し、ダダリアがどれだけ美しいかを語りだし、それにアンディーも便乗してダダリアの美貌の自

慢大会のようになったが、もうノアは止めなかった。

それよりも気になることがあったのだ。

『目を見た瞬間から皆ダダリアの虜』

それは一つのキーワードのように思えた。

（もしかして、催眠術でも使うのか？さっき俺を押し倒したのもそのつもりで……）

そう考えればある程度話の筋は見えてくる。

何かしら太らせる原因を陛下の食事に入れ急に太らせて、このように孤立させた上で催眠術を使い、自分の思い通りに事を運ぼうとしている……。

ダダリア以外に中に協力者がいるのだろう。

そこはおいおい調べるとして、それよりもダダリアが陛下を使つて出した指示などが悪影響を及ぼす前に撤廃させなければならぬ。それに催眠術の魔の手が他の者にも及んでいるなら早急に手を打たねば。

一人押し黙り考え込んでいたノアはふと気付いて、二人に質問した。

「で、お前らも目を見られたのか？何か合図とかあるのか？見られる以外に何かされるのか？」

「いやゝまだなんツスわゝ。オレらダダリア様ファンクラブの者としてはずい見つけてもらいたんスけど」

「すまない。聞いた俺がバカだった」

真っ直ぐな目で見つめられ、ノアは話を切った。

ダダリアも人を選んでいるということか。

しかしここにもても埒があかない。

近衛連隊長と内務大臣にも話を聞きに行こう。

そうノアが決めた時、待機室の扉の方から玲瓏な声がした。

甘く痺れるようなその声に、部下の二人は弾かれたように振り向く。

「聞きたいことがあるなら、ワタシに直接聞けばいいのに」

開けられた扉の縁にもたれ、件の美女は楽しげにこちらを見やった。いつの間に扉を開けたのだろう。

扉を開ければ気が付いたはずだ。

それを誰にも気付かれずにおこなうとは、先ほどの素早い体術も合わせて、この女はなかなかどうして一筋縄ではいかない。しかも催眠術も使うとなれば、最大級の警戒が必要だ。

身を硬くしたノアにダダリアは不敵に微笑んでみせると、ゆったりとノアの方に足を進めた。

「はあい、隊長さん。貴方の質問に答えに来たわよ？何でも質問してよくてよ？」

メイド様のアブナイ魔力？その4

「はあい、隊長さん。貴方の質問に答えに来たわよ？何でも聞いてくださったらいいわ」

不敵な笑みと共に登場したダダリアにノアは敵意の眼差しを向けた。そんなノアに気付かず、アンディーとボビーは鼻の下を伸ばしてダダリアを見つめている。

ソファの前までダダリアが来るとアンディーは素早く身を退け、ダダリアにノアが掛けているのとは違うソファに座るように促した。

「ささ、ダダリア様。こちらにどうぞ！」

「何、ずるいぞ！アンディー！！そっちのソファの方がお前に近いじゃないか。ささ、ダダリア様、こっちのソファに！こっちの方がふかふかッス！」

訳の分からない言い合いを始めた二人にダダリアは迷惑がることなく、優美に小首を傾げてみせる。

「困ったわね。どっちも選べない」

その仕草の美しさに二人はしばし心を奪われ、ダダリアを見つめる。ノアも感心せざるを得なかったが、最大級の警戒の前には美女の微笑みもただの感情表現だ。

ダダリアの意図するところが分らず、ノアは眉を寄せた。

（なんだ？何かを仕掛けるつもりか？）

ノアの体に緊張が走り、組んでいる手に力が籠った。

（やられる前にやらなければ、この女は油断すると危険だ）

先ほどの失態はもう二度としない。

ノアがそう心に誓うのとダダリアが歌うように軽やかに言い放ったのは同時だった。

ダダリアの体が動いた瞬間、ノアは全神経を集中させた。

だが、ダダリアは飛び掛ってはこなかった。

「ああ、こうすれば喧嘩しなくて済むわね」

言うが早いか、ダダリアはさも当たり前のようにソファに腰掛けたノアの膝の上に腰を落としたのだ。

柔らかい感触がノアの太ももの上で弾む。

芳しい色気が長い金髪と共にノアの体にかかる。

流石にこの時ばかりは最大級の警戒も役には立たない。

ダダリアが仕掛けてきた瞬間にやり返すつもりでいたが、膝に座るなど想定外だ。

ノアの動揺などまったく気にせず、ダダリアは涼しい顔をしている。側では二人の部下も驚きつつも羨望の眼差しをノアに向けた。

「な、な、な、なんで膝に座るんだ？」

ノアがダダリアを除けようと体を捻るが、ダダリアは更にノアに体を近づけてくる。

「落としちゃー！」

「や、じゃない！除け！！俺に色仕掛けは通用せんぞ！お前の意図はなんだ！何が目的で陛下を太らせた！」

焦るノアに対して、ダダリアは余裕だ。

真つ赤な唇の端を上げるとさも楽しそうに目を細める。

ダダリアはそつとノアの頬に手を当てた。

「ふふつ。近衛隊長さんって、フェミニスト。口は乱暴なのに、手は出さないのね」

「ふざけるな！」

その手を払いのけるとノアは勢いよくソファから立ち上がった。

膝に座っていたダダリアはその勢いに押され、ソファの端に追いやられた。

「いたあい」

ダダリアは甘えたような声を上げたが、ノアは冷たく見下ろした。

「いい加減にそのふざけた芝居はやめろ。お前は何の目的で陛下に近付いた？」

蒼い瞳は凍てつく冬の月のように鋭く輝き、眼下の美女の陰謀を白日の下に晒そうとした。

その視線に応えるようにダダリアは蠱惑の笑みで薄紫の瞳を揺らす。

「一つ、隊長さんは誤解をしてらっしゃるわ。ワタシには陛下を急激に太らせることはできなかった。それはここにいる二人が証明してくれる。陛下がぶっくり太られたのは1カ月前。ワタシが来た

のが半月前。ねえ、そうでしょ？」

ダダリアはソファに倒れ込んだ状態のまま、ぼけつと事態を見つめている部下の二人にウインクさせてみせた。

バチンつと音が聞こえそうなほどのそれに、今までノアを羨ましそうに見つめていた二人は顔を上げた。

「は、はいっ！その通りッス！」

「ダダリア様は陛下が巨大化されてからいらっしやったッス！」

彼らに尻尾が生えていたなら、今この時ほど尻尾が活躍した場はないだろう。

きつと千切れんばかりに尻尾を振っていたに違いない。

しかし残念ながら彼らはビクリ人間ではなく、ただの残念な近衛隊員なので、尻尾の代わりにその頭を馬鹿みたいに激しく上下させた。

その態度に満足したのか、ダダリアは長い脚を組むと、ノアの方を見やった。

「ね？」

「黙れ！そんなこと、お前に協力者がいればいくらだって行える！」

ダダリアを警戒するように僅かに距離を取り、ノアは腕を組んでダダリアを睨みつけた。

「それもそうね？でもね、ワタシが何かヤマシイことをするなら、まず第一にターゲットの側でのんびりオママゴトなんてしない。的

確に最速で事を片付けるわ。当たり前でしょ？それとも隊長さんはワタシが陛下を足蹴にするためだけに来たとお思い？」

確かにダダリアの言う通りだ。

何か陛下を使つて事を進めるにしてみれば、彼女のやり口はいささか常軌を逸してる。

催眠術を使っても、使っている本人がここまで露出していれば、『私が犯人です』と主張しているようなもの。

陰謀とは陰で謀つてこそ。

ダダリアは陰謀と表現するにはあまりに表に出すぎている。

だからこそ、ノアも強行姿勢でダダリアを捕縛することができないのだ。

彼女の背後に隠れているものの存在が分るまでは。

真の首謀者はダダリアの後ろで、ノアが彼女に踊らされる姿を楽しむに待っているのだ。

（乗せられるな。奴の裏を読み取れ）

陛下を足蹴にする姿に血管がブチ切れるほど怒りを感じても、それすらもダダリアの思惑に思えてならない。

ぐつと口の中を噛むと、ノアは一層顔を険しくした。

「それに事前に一番邪魔な存在も把握しておく。腐つても国王陛下よ？国家を上げての警備体制が取られているのだから。ふふつ、折角キケンな番犬が留守にしているのに、彼が帰って来るまで待つている訳ないじゃない。その男に気付かれる前に安全な場所に逃げる。至極真つ当なことでしょ？——ああ、でも……」

ダダリアはふいに言葉を切ると自らの真つ赤な唇をなぞった。

「それでも彼の帰りを待っているかもしれないわね……」

ダダリアは試すような視線をノアにまわりつかせる。

その挑発的な態度にノアは感情的になりそうな自分をぐっと抑え、組んだ腕に力を入れた。

「何故だ？」

ダダリアは真っ赤な唇でせせら笑った。

「消すのが一番安全だからよ？」

メイド様のアブない魔力？その5

部屋の空気が一瞬で張り詰めた。

ぶつかり合った視線が青白い火花を上げてクラッシュし、部屋の気温は急速に下がる。

凍りつくような緊迫感に、二人の部下は固唾を飲んだ。

「ふんっ、なら消してみろよ？」

ダダリアの挑発にノアはくっと思を鳴らす。

対するダダリアはノアをじらすようにゆったりとソファに身を預け、脚を組み替えた。

その余裕の態度に、ノアは自分の心の中を見透かされたような不快な気分を味わった。

だがここで激昂する訳にはいかない。

それこそ愚か者の行為だ。

どんな美しい姿をしていても、目の前の女の本性は狡猾な悪魔だ。互いの出方を窺がうような心理戦を制するには、上辺の言葉や相手の挑発に気を取られている訳にはいかない。

「ワタシが陰謀を企てるなら……よ？本当に消すなら、今まで何度も機会があつたじゃない」

暗に先ほどの国王の執務室でのやり取りを言いたいのだろう。

ノアの肩眉がピクリと動いた。

いくら不意をつかれたとしても、一軍人としてこのようなふざけた格好のメイドに押し倒されたとあつては格好がつかない。

大の軍人がメイドに押し倒されたのだ。

陛下への不敬もさることながら、プライドをいたく傷つけられたノアがダダリアを必要以上に毛嫌いするのはこれが原因なのだが、ノアは断固として認めなかった。

その消したい過去を蒸し返すダダリアに怒りを通り越して殺意を感じるが、ここでその堪忍袋の緒を切ればダダリアの思うつぼ。

我慢に我慢を重ね、ノアは血管がはちきれそうなほど力んだ。

地獄で悪魔が見ても恐れおののくほどに強張った表情に二人の部下は身を縮み上がらせる。

溢れる感情を押し殺すとノアは低く問うた。

「そうやって、話を別の方に持っていていこうとしているのか？」

「どうあってもワタシを悪役にしたいみたいね」

「悪役だろ？陛下を足蹴にしたやつなんて前代未聞だ」

「ふふつ、違くないわね。ただその一点に関しては」

ダダリアは否定することなく、ノアの言葉をすんなり受け入れる。

このやり取りを心の底から楽しんでいるよう。

自分ばかりが冷静さを失うばかりで、どうやってもダダリアの化けの皮を剥がすことは叶わない。

ノアはダダリアに気付かれないほど小さく息を吐くと、核心に触れた。

「陛下に何をした？体型だけじゃない。何故陛下はお前の愚行を甘んじてその身に受けていらっしゃるのだ？催眠術か？」

鋭く光った瞳はダダリアの全てを見逃すまいとする。

凍てつくような視線を見つめ返し、ダダリアは身を起こすとノアを

真っ直ぐに見やった。

何を考えているのか読めない表情には先ほどの笑いはない。ただ追い込まれて色もない、という訳ではなく、全ての興味を失ってしまったかのような冷めているのだ。

「催眠術？」

「そうだ。人を思い通りに動かすことができるのだろうか。」

催眠術というものがどこまで人の心に有効なのか。

ノアにはまるで判断がつかなかった。

むしろ、目を見ただけで思いのままに人を動かすことができるなど信じられない。

しかし目の前の妖しい美女はそれに近いことをして見せたのだ。

何かトリックがあるのかもしれないが、大きく出るにこしたことはない。

ゆつくりと言葉を選ぶとダダリアの出方を待つ。

しかしノアの想像に反してダダリアは僅かに眉を寄せただけだった。必死にごまかそうとしてるといっても、言葉の意味を理解できずにいるように見える。

「なんのこと？」

「ごまかすな。人の目を見て、そいつに術をかけるんだろ？」

想像半分、勝負に出たノアに、ダダリアはやっと合点がいったと手を打った。

「ああ、さっき貴方を押し倒した時のことを言ってるの？違う違う。」

催眠術なんて怪しいこと、ワタシはしないわよ。そんなことしなくても皆、ワタシの言うことを聞いてくれるし！」

押し倒すというフレーズに目が飛び出さんばかりのアンディーに向かってダダリアはねっ、そうでしょ？つとばかりにウインクをした。それは爛漫と咲き誇る華が乱れ散るよう様になって見える。

確かに催眠術などいらないと豪語するだけはある。

その絶対的な美しさの前にアンディーは弾かれたようにぶんぶん頭を振る。

自分の思い通りに事が進んで満足だとばかりに頷くと、ダダリアはノアの方を意味ありげに一瞥した。

そして指でくいくいとアンディーを招く。

（何がしたいんだ？）

ふらふらと引かれるようにダダリアに歩み寄るアンディーにノアは表情を陰しくした。

アンディーに何か仕掛けるつもりなのだろうか。

「ワタシは催眠術なんて使わないわ。でもその代わり、少し変わった特技があるの」

ダダリアは歌うようにそう言うのと近付いてきたアンディーの腕を自分の方に引き寄せた。

ノアは弾かれたように身を乗り出して、離せと叫んだがすでに遅い。アンディーは女王蜘蛛の糸に手足を取られた哀れな羽虫のよう。

魅せられたようにされるがまま、高い身長を折ってダダリアの方に身を屈ませる。

そのアンディーの頬に手をやると、ダダリアは先ほどノアにしたようにぐいっとな顔を近づけた。

「おいつ！」

「貴方、本当は若い女の子は好きじゃないんでしょう？」

ノアが咎めるとダダリアがそう呟いたのは同時だった。

「はいっ？」

ノアは思わずすっこけそうになった。

先までの緊張感が嘘のよう。

場違いな言葉に耳を疑う。

「な、何を言ってるんだ？」

だが、ノアの言葉に誰も答えない。

その代わりとばかりにアンディーは急速に顔色を変えていく。

冷や汗を浮かべ、うろたえだすアンディーとは対照的に、ダダリアは心底楽しそうに微笑んだ。

「あ……ああ……」

「ふふっ、みんなと一緒に若い娘のいる店に行っても心から楽しめないのね。可哀想に。十は年上じゃなきゃダメなんだ？ふん、王妃の女官長をしている女性が好きなのね」

ずっと心の秘めていた秘密を暴露され、アンディーは恥ずかしさよりも恐怖に震えていた。

ずっと隠してきた自分の性癖がこんなところではれてしまうとは。ひっと喉を引きつらせたアンディーにダダリアは優しく微笑んだ。

「あら、いいのよ。人の数だけ性癖があるんだもの。認めてしまいなさい。自分に嘘はつけないのよ？」

その甘美な囁きにアンディーの恐怖は霧散してしまったかのようにだ。憑き物が落ちたかのようにさっぱりした表情に変わる。

ぼんやりとダダリアを見つめ、答えを探しているように見える。

アンディーの態度にダダリアは満足げに目を細める。

ダダリアの真つ赤な唇が最後の呪文を唱えた。

「さあ、欲望のままにイキなさい」

メイド様のアブナイ魔力？その6

「何を……」

目の前のやり取りがノアには信じられなかった。

ダダリアの言葉も、アンディーの態度も。

ダダリアが何をしたいのかもさっぱりだ。

しかし、一つだけ分るのはダダリアの言葉にアンディーが変わったこと。

「オ、オレ……」

ぽつりとアンディーは呟いた。

「大丈夫か、アンディー？顔色が優れないぞ。何をされた？」

ノアがアンディーの肩を揺さぶるもアンディーは硬い表情のまま。これを催眠術と言わず、なんと呼ぶ。

ノアがそう叫ぼうとしたが、それはアンディーの絶叫によって阻まれた。

「隊長……！」

「な、なんだ？大丈夫か？アンディー」

「オレ、隠してたんツスけど、実は熟女好きなんツス！」

「はい？」

アンディーの決死の告白にノアは目を丸くした。

そんなこと別に聞いていなし、この場で叫びながら告白されるようなことでもない。

戸惑うノアを他所にアンディーは止まらない。

涙を流しながら、ノアに食いつかんばかりの勢いで叫んだ。

「オレ、王妃様とか王妃様の女官長のクレアさんとか、ちょっと体型が崩れてきたかなぐらいの熟女が好きなんツス。そりゃ、ダダリア様のような完璧美女も捨てがたいけど、やっぱりあのちよつと脂肪がついた感じの年季の入った体が……」

「待て待て。好きなのは分った！分ったから、そんな絶叫しながら告白するな！」

迫り来るアンディーの勢いにノアはたじたじ。

どこの誰の体つきがいいだの、若い女性では満足できないだの、彼の熟女論は留まるところを知らない。

どんなに叫んでもアンディーの耳には届かないらしく、ノアはしかたなく最終手段に訴えることにした。

「いい加減にしろ！」

顔面に拳を一発。

その激しすぎる突っ込みに、アンディーはもんどりうった。

「落ち着け。お前がどこの誰が好きだろうが、どんな好みを持っていようが構わない。ただ、TPOを考えろ！」

はあはあと息を切らしながら力説するノアをアンディーは潰れかけた鼻を摩りながら見つめ返した。

その目は信じられないとばかりに見開かれている。

「隊長……」

「なんだ？」

「オレの好みを認めてくれるんツスか？オレ、ずっと皆に拒否られると思ってたツス！さすが隊長ツス！！」

アンディーは鼻から血を流しながら、むせび泣いた。

「オレ、オレ…隊長に一生ついて行きます！」

「いやいや、お前は俺の話を聞いてたのか？今はそんなこと言うてる時じゃ……」

「オレ、今からクレアさんに告白してきます！！」

そう言うが早いか、アンディーは部屋の外に駆け出していった。

そこは海の男、走り出す勢いも半端なく、ノアの止めるのも聞かずに出て行ってしまった。

その後ろを訳の分からないまま、ボビーがついていく。

「なんだ？今のは……」

ノアは呆然とアンディーの消えた扉を見つめた。

話の流れが見えてこない。

答えを探すように、ソファの上でゆったりとくつろいでいるダダリアの方に向き直った。

戸惑いを隠せないノアにダダリアは満足げに微笑んでみせる。

「どう？面白い特技でしょ？」

「特技だと？」

「ワタシ、人の欲望が見えるの。その人が隠したいと思えば思うほど色濃くそれが分る」

（だからアンディーの隠したい性癖が分ったってことか。でもそんなことは事前に調べれば分るはず……）

ノアはダダリアの嘘を見抜こうと全神経を尖らせた。ダダリアはそっと立ち上がるとノアの方に歩み寄る。

「人は誰しも欲望を持っている。でもその欲望と上手に生きれずに、必死に押し殺して歪めているものなの。でもワタシ、美しすぎちゃって、どうやら人の欲望を掻き立てるみたい。こうやってじっと人の目を見るとね、その人の欲望が手に取るように分っちゃうの。そして、そんな欲望に直接声をかけることができる」

ノアのすぐ側で立ち止まったダダリアはその薄紫の瞳を妖しく光らせ、ノアを上目遣いに見つめた。

「本能のままにイキなさいって！」

真っ赤な唇から漏れる吐息はまるで甘美な毒のよう。ノアを惑わせるようにその耳朵をくすぐる。

「じゃあ、さっき俺の欲望も覗いたってことか？」

軽蔑するようなノアにダダリアは苦笑するように肩を竦めた。

「お堅い近衛隊長さんはどんな欲望を抱えているのか、欲望のままに生きたらどうなるのか、とっても気になったのに……。大臣や閣僚とかお偉いさんって、見た目の堅さからは想像も出来ないほどえげつない欲望の塊を抱えているものなの」

彼女の存在に物申さなくなった閣僚達の態度はここにあったのか。彼女は一瞬のうちに彼らの一番の弱みを握ったのだ。

プライドが高い官僚達だからこそ、効果てき面。

誰一人、彼女の存在に物申すことができなくなったのだろう。

そして国王陛下も……。

トリックか、はたまた本当に見えるのか。

どちらにしろ、彼女はとんでもない能力を持っている。

ノアはごくりと唾を飲み、ダダリアの言葉に耳を傾けた。
が……。

「それなのに、貴方ときたら……。ほんと、つまんない。ノーマルにも程があるわ!」

「はい?」

ダダリアの叫びにノアは今までの険悪さを忘れ、ポカンと口を開けた。

メイド様のアブナイ魔力？その7

ダダリアは今までの相好を崩し、忌々しげに眉を寄せた。

大切にとつておいた甘いはずのケーキが果てしなくまずかった…そんな失望感がありありと伝わってくる。

とんでもなく期待はずれだったとばかりにダダリアは被りを振った。

「本当面白みのない男。カタブツだからムツツリなのかと思ったら、何も知らないお子様だったとは。十四、五のガキの方がまだ人の性癖について詳しく理解できるわよ。陛下の言ってる『囚われ云々』の意味も分ってなかったから、もしやと思って押し倒したら案の定ワタシの色気に手を出す度胸もないし、おまけになんの欲望も見えてこない！」

ダダリアは非難交じりにノアに向かって、ビシッと指を差した。思いもしないことを糾弾され、ノアは目が点になる。

「欲望は人生の糧よ！それなのに健全な欲ばかりなんて、貴方！大人として異常よ！！」

品行方正を尊ばれるならまだしも、非難され異常とまで言われ、さすがのノアもショックに打ちひしがれた。

しかしダダリアの言葉は止まらない。

「人として浅いわ。部下の性癖も理解できないで、しっかり受けとめられると思っっているの？」

「おい、言いたいことばかり言いやがって。何を根拠に……」

「でも、凶星でしょ？」

ダダリアは非難めいた眼差しをじっとりとノアに向けた。
何故こんなことで人としてなっていないとばかりに非難されなければ
ならないのか。

しかもふざけたメイド服の女にだ。

「ふざけるな……そんなことお前に言われる筋合いはな……」

ノアが怒りをぶつけようとした瞬間、またしてもダダリアはノアの
ネクタイを掴んだ。

さも当たり前のように自分の方に引っばる。

突然のことにふんばることもできない。

ノアの体は傾き、芳しい香りのする金髪に顔が埋まる。

それだけでも鼓動を早くするのに十分なのに、あろう事かその長い
生脚を大胆にノアに絡ませた

「怒ってばかりじゃなくて、女を手玉に取るような甲斐性の一つ
も見せてみなさいよ。た・い・ちよーさん！」

嘲笑するような声に挑発されノアはかつとなったが、それ以上に甘
い悪魔の囁きと甘美な香りは彼の本能を刺激した。

心臓が更に早鐘を打ち、体の芯が燃えるように熱くなる。

ノアだって男だ。

欲望がないだの、健全すぎるだの言われても、俗世を捨てた修道僧
ではない。

美女を前に心乱されない訳がない。

だが……。

ノアは感情に抗うように喉を鳴らした。

さつきからこの人外魔境なメイドに振り回されてばかり。
その扇情的な言葉に乗せられて、彼女の思い通りに行動させられて
いる気がする。

（癪だ……）

ダダリアはノアが手を出さないと知っていてからかっているのだ。
制服のネクタイを掴んだまま、ノアが激昂するのを待っている。

「どうしたの？隊長さん……」

薄紫の瞳が揺れた、その瞬間――。

ノアはぐつと腹に力を込めると一気に顔を上げた。

それと同時にダダリアのしなやかな体を担ぐように抱きかかえる。
柔らかな感触が服越しにノアの腕に伝わるが、それを堪能している
場合じゃない。

予想外のノアの行動にダダリアも避け切れなかったのか、抵抗する
ことなく目を見開いた。

言葉もなく、されるがまま。

担いだダダリアを近くのソファの上に乱暴に投げ落とすと、ノアは
冷たい視線を投げ落とした。

相手がお望みなら、そのように扱って何が悪い。

力いっぱいダダリアの手を掴んで自由を奪うと、ノアはその瑞々
しい肢体に馬乗りになった。

金髪が乱れて、白い肌を通り黒いメイド服の上に流れる。

上気した頬は僅かに朱を帯び、驚愕に見開かれた瞳はより一層魅惑
的だった。

ノアはその波打つ金髪を払うようにして、彼女の頬に手をやると、

その耳に顔を近づけた。

「これで満足か？」

ふんつと鼻を鳴らすと、ノアはダダリアから体を離れた。

そのままダダリアに背を向けて扉の方に向かう。

その背をじっと見つめる蠱惑の瞳には何の感情もない。

怒りも困惑も……。

扉は先ほどアンディー達が飛び出していつて開け放たれたままになっている。

扉まで来るとノアは僅かにダダリアの方を振り返った。

ソファの上では身を起こしたダダリアがそのか細い手首をなぞっている。

きつく掴みすぎただろうか、と後悔が一瞬頭をよぎったが、否と素早く打ち消す。

（あの女に同情はいらない）

ノアは深い蒼の瞳を怒りに燃え上がらせた。

「お前の好きにはさせない。俺がお前の正体をあばいてやるよ」

憎しみの籠ったままに扉を閉め、ノアはその場を後にした。

ばんつと激しく閉められた扉は、あまりに力を込められた所為で僅かに振動している。

「ほんつと、つまらない男……。これでしてやったりと思うつもり？」

ダダリアは乱れた髪を直すようにぱさりと後ろに払うと、ソファにどさりとその身を預けた。

彼女も緊張していたのだろうか。

ふうと息を吐く。

そしてこれが自分のスタンスだとばかりに大きく片脚を振り上げて組む。

思わずため息が零れそうなるほど様になる仕草はいつも通りだ。

だがその顔に浮かぶ表情はいつもと違っている。

「……どこまでも健全で、歪んだ欲もなくて、お子様並みにノーマルで……そのクセ、色気だけは一品なんて、無自覚でやんなっちゃう」

じつとりとノアが消えた扉を見つめ、被りを振った。

「まあ、遊びはここまで。これからが本番。覚悟しなさいよ？ご主人様」

疑惑のメイド様

「どうしたもんだかな……」

ノアは王宮の渡廊下で途方にくれていた。

カンナリオ王国の国政を担うオートラン宮殿の左翼部分と中央部分を結ぶそこは、こじんまりとした中庭になっている。

綺麗に刈られた芝生は青く、意匠を凝らして配置された木々には色とりどりの花が咲き誇る。

その真ん中では大理石でできた女神が神々しい笑みを浮かべてポーズをとっていた。

まるで絵画のよう。

神話の一部分を再現しているのだろうか。

ノアはそういうことに詳しくはないし、意識することもなかった。ふと目に留まった色の鮮やかさや何気ないようで意味のある配置に人は芸術性を感じるのだろう。

しだが今のノアにそんな余裕はない。

渡り廊下の柱にもたれかかり、見るともなしに庭に目をやった。

新緑の若葉が夕暮れの日の光を受け朱く照り返し、目映いばかりだ。ちちちつと愛らしいさえずりが心地よい陽気とともに降り注ぐ。

僅かに涼気を含んだ風がノアの肌を撫で、芝生の上を駆けていく。その風につられるように視線を向ける。

視線の先では庭師が彫刻の側のさつきの木を裁定していた。

真剣に木にはさみを入れる彼の顔にはうっすらと汗が滲んでいる。

（ああ、ここは穏やかだな）

遠くを見つめるように目を細めたノアの脳裏には国境の町があった。北に位置するその町は高い山々に囲まれ、高度もあるためか、春の訪れがどこよりも遅い。

身を刺すような風は荒んだ人の心にも入り込み、内紛で荒れた町並みが人の負の感情ばかりを盛り上げる。

それでもノアが始めてかの地を訪れた時に比べれば幾分ましになった。

つい昨日までいた地に思いを馳せ、ノアは自分の不可解な感情に苦笑した。

あんなにもかじかむ手先に不満ばかりだったはずなのに。

何故だろう、今となってはあの街の空が急に恋しく感じる。

きつとそれは、あの重く垂れ込む雲がノアの知っている王宮の空と同じだったから。

3ヶ月前、王宮もあの町と同じく冷たい季節に閉ざされていた。

だがここはいつの間にか凍える世界に別れを告げ、新たな風を迎え入れたらしい。

いや、季節だけじゃない。

王宮も人も全て、ノアの知らない姿に様変わりしている。

ノアだけを灰色の空の下に残して……。

ノアは春の陽気さとは裏腹なほどに苦い吐息をこぼした。

吐息は爽やかな風にさらわれて、茜色の空へと消えていく。

ノアは先ほどまで内務大臣の部屋を訪れていた。

もちろん、ダダリアという怪しいメイドについて聞くために。

アポなしで自分の部屋に招き入れてくれた大臣は、内紛鎮圧でのノアの働きに労いの言葉をかけ、至極和やかにノアの質問に答えてくれた。

ただ、『ダダリア』という言葉が出てくるまでは……。

彼女の名前が出た瞬間に大臣は顔色を変え、用事を思い出したと言

つてそそくさとノアを追いついたのだ。
それから他の者を訪ねても反応は同じ。
皆ダダリアについては口を閉ざし語ろうとしない。

（まったく、どんな弱みを握られたんだか……）

国家の行く末を担う閣僚や官僚が情けない。
とは思うものの、陛下の執務室で見たあのやり取りを思い出すと、
ダダリアの特技というのはなかなかどうしてあなどれない。

（特技というよりは、魔法だな。あれは。しかもとびつきりたちが
悪い。かけた本人と一緒に……）

ダダリアに足蹴にされ、嬉しそうに相好を崩す陛下を思い出し、
ノアは頭を抱えずにいらなかった。
どこまで本当かは知らないが、人の欲望を見取り引き出すという力
は、想像以上にやっかいだ。

言葉だけを聞いていると馬鹿らしい酒場でのジョークのように聞こ
えるが、実際目の当たりにした身としては笑い飛ばすこともできな
い。

小さな変化がその全てを変えてしまう危険を孕んでいるのだ。
温厚で威厳ある陛下が、虐げられることに快感を覚えるマゾヒスト
になってしまったように。

ことは本人一人の嗜好の問題ではなく、国家の威信に関ってくる。

まあ、収穫がなかった訳ではない。

ダダリアの正体については依然不明であるが、現在の状況について
は粗方理解できてきた。

ただ、ノアの予想に反して誰一人国王の変化に『陰謀』という言葉
は使わなかった。

陛下はまるまる太った以外はいたって健康で、病気なのかなんのが未だ検討もついていないらしい。

ただ、急に国の象徴たる国王陛下が太れば国民に動揺が走るだろうという理由で、厳粛な緘口令を敷き、陛下の情報が漏れないように、軽い軟禁状態にしている。

陛下の窮状を知っているのは一部の閣僚と近衛隊員数名だという。他の者は不審に思っても情報一つ与えられておらず、ただ陛下は元気であるとのみ聞かされているようだ。

（まったく姿が見えないのに元氣って聞かされてもな……）

ノアはははつと乾いた笑みを浮かべた。

帰還時の異様な返答の理由だけは解決した。

だが、この件は本当にただの激太りだけなのか――。

病原菌を使った生物テロだとは考えられないのだろうか？
でも何のために、しかも陛下だけに対して。

考えれば考えるほどややこしくなっていく。

ノアは頭を抱えた。

情報が増えても、かみ合わないピースが頭の中がいつぱいになるだけ。

全て並べたらどのような絵になるのか。

「くそっ……」

ノアは腹立ち紛れに柱を拳で叩いた。

柱はびくともせず、ノアの感情を受けとめた。

ずんつとした痛みが拳から腕全体に広がる。

ふとノアが視線を上げると、その先にいた庭師と目があつた。
彼は汗を拭い、ノアに対して屈託ない笑みを浮かべ会釈した。

つられてノアも頭を下げようとした。

「……」

美しい絵画のような景色だった。

傾きゆく日の光が庭に違う色を添える。

その中心にいる庭師も物語の登場人物のように風景に溶け込んでいた。

一部の隙もなくあるがままの風景。

しかしどこかが異様だった。

それが何なのか。

それに気付く前にノアは駆け出していた。

穏やかな空気が細かく震える。

その中心にある女神が麗しい笑顔のまま、その身をもたげた――。

疑惑のメイド様 その2

ずんつと腹の底に響くような振動が、麗らかな中庭に走った。遅れて弾けるような音が響く。

ノアが駆け出したのと、女神像の腹の部分が破裂するのは同時だった。

強い衝撃と共に細かな破片が勢いよく飛ぶ。

突然のことに事態を飲み込めていない庭師は咄嗟に顔を手で覆ったが、一番の脅威は彼の頭上すぐに差し迫っていた。

白亜の女神はノアの目の前で、ひたむきに仕事をする庭師を抱擁せんと近付いていく。

ゆったりと屈みこむ女神――。

スライドショーのようにコマ送りにノアの網膜に焼き付く。

こんなにも緩やかに女神は傾いているのに、どうしてだろう。いくら走っても、もどかしいほど距離は縮まらない。

倒れゆく女神はまるで死の鉄槌のように庭師に襲い掛かった。

（くっ……間に合うか）

駆け出したノアの足元で綺麗に刈られた芝生が弾け飛ぶ。

丹精込めて庭を育てた庭師には悪いが、今はそんなことに構っている余裕はない。

その庭師自体に危険が迫っているのだ。

あと少し――庭師の頭上すぐにまで麗しい笑みが迫っている。

一か八か、ノアは芝生を強く蹴り上げると庭師目掛けて飛び込んだ。庭師にタックルをかまし突き飛ばす。

だが、猛威を奮う女神はその手を緩めない。

宙に浮いたノア目掛け、勢いを増し突っ込んでくる。

ズツ……ドォーン。

鼓膜はおるか、体の奥にまで響く轟音を上げ女神像が地面で弾ける。鋭い破片が四方に霧散し、白煙がもうもうと上がった。

白い塊が弾丸のように襲い掛かる。

その間をはいくぐるようにノアは地面に転がり込んだ。

勢いは治まらずノアは地面を激しく滑ったが、素早く身を起こすと体勢を立て直す。

そのままの状態で、手早く状況確認をする。

破片で制服が破れ、血が滲んでいるが大したことはない。

側で呆然と視線をさ迷わせている庭師にも怪我はないようで、ノアはほっと胸をなでおろした。

後、0.1秒でも動き出すのが遅ければ庭師は女神像に押しつぶされていただろう。

そしてその視線をもっと先に向ける。

夕焼けに染まる中庭は先ほどよりも朱を強くしていた。

全てを包む朱色は見る影もなく粉々に崩れた女神像も、未だに木々の間をうごめく白煙も優しく包み込んでいる。

穏やかな風が吹きぬけ、何事もなかったように白煙を押し流していた。

「大丈夫か？」

ノアは庭師に手を貸してやったが、彼はまだショックから抜け出ていないらしく、焦点が定まらないまま、ノアに言われるがまま立ち上がった。

流石にあの音に気付かない訳がない。

慌しい足音が響いたと思うとあっという間に人だかりが出来、崩れ

た女神像とノア達を興味深げに取り囲む。

「誰か、彼の手当てを」

あつという間にできた人だかりの中から城の警備を担当している王宮護衛騎士団の者を見つけると、ノアは庭師を医務室に連れて行くよう指示し、他の者に現場を保存するように依頼した。いきなり庭に置かれた彫刻が爆発するなど考えられない。

国家を狙ったテロ行為か――。

国王の入る王宮でここまで出来るんだぞ、との意思表示にもとれるが、いかんせん場所が閑散とした中庭。

そこに一体置いてある彫刻が壊れてもそこまで国家に戦慄は走らない。

こんなことがありましたから、気をつけましょうね、程度だ。

どこの反政治団体でも、やるならもっと派手に意思表示するのがセオリーだろう。

（じゃあこれは？）

ノアが壊れた女神像を見下ろし、一つの可能性に思いあつた時、遠くからノアを呼ぶ声がした。

振り返ると、こんもり出来た人だかりで懸命に手を振っている男がいた。

人にもまれ、あっぷあっぷと溺れながらもこちらに近付いてくる。一度沈んだらもう浮き上がってこないんじゃないかとノアは心配したが、ノアの予想に反してその男はやりきった笑顔で人ごみを抜けてきた。

小さな体はちよつとばかり腹がせりでいて、彼の着ている近衛隊の制服の上着は弾け飛びそうだった。

その年の男性なら、その体型は恰幅があり威厳があるように見える

が、彼の場合どこか愛らしく、親しみやすさしか感じられない。少し薄くなった髪が気になるのか、慎重かつ丁寧に撫で付けると彼はノアに駆け寄った。

「ノア隊長、これはどういうことだね？君は大丈夫かい？」

「近衛連隊長！」

彼が髪を直すまでじっと待っていたノアは彼の関心が自分に向いたところで、ようやくと事の顛末を彼に説明することが出来た。

小柄な彼に対してノアは出来る限り失礼にならないように、彼に視線を向けた。

若干腰を落としてもまだ身長差があるので、頭を下げた状態になる。

この体勢が意外と首にくるのだが、ずっと上を見上げている彼はもつとしんどいはずだ。

彼はそんな体勢の不満など一つも漏らさずに、真剣な表情でノアの説明を聞いていた。

女神像が壊れたところでは大きな目を更に大きくして驚愕している。

「でもお会いできてよかった！先ほどお伺いしたのですがお留守でいらっしやっただったので……。連隊長には色々お聞きしたいことが……」

「ああ、色々周りから聞いたのかい。君はお役目大事の人間だからね、驚かさないように帰還すればすぐ話をしようと思っていたのだけれど。まさか君がこんなに早く帰ってくるなど思わなかったからね。ちょうどこの廊下を通ってよかったよ。君に会えて」

ノアを励ますように励ますように連隊長はにこりと微笑み、ノアの

肩を叩いた。

「君に怪我がなくてよかった。陛下は君を大いに信頼しておられるからな。一の側近に何かあれば、もっとお心を病まれるかもしれない」

「連隊長、ありがたいお言葉で……」

上司の労いの言葉にノアは畏まって敬礼をしようとした。ふっとあげた視線が近衛連隊長の先にいる野次馬達の群れを捉えた。視界の片隅に引っかけかりを覚え、ノアは言葉を切った。

「どうしたね？ノア隊長」

連隊長は不思議そうにノアの見ている方に視線を向けたが、何一つ心当たりがないらしく首を傾げた。

その連隊長の言葉もノアには届かない。

その瞬間、ノアの耳には一切の音も届かず、ただ見つめる先にいる人物だけをその目に捉えていた。

夕暮れの日を受けて愛らしく染まった頬に不敵な笑みを浮かべ、その人物は野次馬の中に埋もれていた。

輝く金髪に、涼しげな薄紫の瞳を持つ、砕け散った女神も足元に及ばぬほどの美貌を宿した際どいメイド服の女。

こんな目立つ人物は全国を探しても他に二人としない。

だが際立った姿をしているのも関らず、誰一人彼女の存在に気付いていないのかすなりと人々の中に溶け込んでいる。

「……ダ！……」

ノアが叫ぼうとした瞬間、その美女はゆったりと自分の唇に人差し

指をあて、軽くウインクして返してきた。

まるで二人だけの秘密だとしても言うように。

そしてノアに背を向けると野次馬に紛れ込むように消えていった。

「ダダリア……。あいつの仕業なのか？」

追う事もできず、ノアはただダダリアが消えていった空間をじっと睨みつけていた。

嘆きの王妃

王宮の警備を担当する王宮護衛騎士団から簡単な事情聴取などを受け、ノアがやっと開放された時にはもう日の光はなく、女神のいなくなった中庭には清かなる月の光が落ちていた。

昨日からずっと働き通しで、それに加えて中庭で起きた女神像の爆発で必要ない運動をしてしまった所為で、流石のノアも疲れがピークに達していた。

しかし休んでなどいられない。

陛下の身に何があったのか、それを近衛連隊長から聞かなければならないのだ。

重い体にむち打って、ノアは近衛連隊長の執務室がある中央宮殿の奥、国王陛下など王族の居城となっているセフィーレンス城に向かった。

そこにはもちろんノアの仕事場である近衛隊長執務室もあり、ノアが先ほど陛下と悲惨な再会を果たした陛下の執務室もある。

どうやら陛下は現在、自分の執務室とその側にある非常用の居間と寝室だけしか行き来することを許されていないらしい。

自分の居城なのに、ここまで行動が制限されているのもおかしい話だ。

だが、陛下自身が今の姿にショックを受け、そこに引き込まれてしまっているのだから仕方ない。

本来の陛下の寝室は別にあるのだが、今ではそちらに行くこともないらしい。

事情を知らない者の目に留まる訳にはいかないし、なにより王妃殿下にその姿を見られてはいけないと思っっているようだ。

（むしろ王妃殿下にこそ、今の状況をお知らせすべきだと思うけど

な)

そうは思いつつも、ノアはただの近衛隊員。

国政に深く関ることに意見など出来るわけがない。

何ヶ月も夫に会えない不遇の王妃殿下に同情しつつ、ノアはセフィーレンス城内に足を踏み入れた。

城内は常にもましてしんと静まり返っている。

夜も遅いからだろうが、それでも常とは比べられないほど人氣がない。

「びつくりするほど静かだな」

ノアの独り言がやけに大きく城内に響いた。

だが聞きとがめる人もここには存在しない。

ノアは凝り固まった筋肉をほぐそうと大きく伸びをした。

「それにしても……」

やるせなさがまた口について出たが、微かな人の声がそれを阻止した。

ノアは神経を張り巡らせ声の主を探すが、城内は先ほどと変わらず沈黙が続いている。

(気のせいかな……。いや、しかし……)

素早く城内の各所に目を走らせたが、異常はない。

(あつ。まただ)

遠く、城の奥のほうから微かな音がもれ聞こえる。

確かに城内は無人ではないから、人の声がしても不思議はない。ただ、ノアが気になったのはその声がまるで女性の悲鳴のように聞こえたからだ。

（――罨か？）

という考えが一瞬過ぎったのは、あの女神像爆発の件があったからだ。

しかし考えるよりも先にノアの体は動いていた。
長い廊下を駆ける。

その先にあるのは庭に面したサンルームで、ちょっとしたお茶会や宴会などに使用され、また普段の昼間は談話室のように公開されている。

昼間は人の談笑が絶え間なく響き渡る明るい空間だが、夜間は人の出入りがまったく閉じられた部屋だ。

不穏な影の正体も分らぬまま、あつという間にノアの視線は広間の重厚な扉を捉える位置まで走りついた。

僅かに開いた扉から滲むように光が漏れていた。

闇雲に突入することほど危険なことはない。

息を潜め、ノアはそつと中の様子を窺がった。

（誰だ？何をしているんだ？）

うつすらと開いた隙間から、女性と思われる影が見えた。

一人ではない。

長いドレスに身を包んだ女性と少し離れたところにメイドらしき黒色のスカートも見える。

ノアは素早く状況を把握しようとアンテナを広げたが、次の瞬間、啞然として言葉を失った。

「っんの馬鹿野郎がつっ!!」

(えっ?)

「いい加減出てきやがれ」

絶叫に近い罵声と共に何かがつなり声をあげてぶっ飛ぶ音がした。ふっ飛ぶと表現するにはいささか音が重た過ぎる。

クッションだろうか?

激しく壁にぶつかり、それでも勢い余って弾かれ、それは床を跳ねてくたりと倒れこんだ。

「何ヶ月も引きこもりやがって! どうせ若い女の子をひっぱりこんでるんだろ」が! この変態っ!!」

今度はぶちぶちと何かが悲惨な音をたてて引き裂かれている。衣を裂く、とかではなく、ベッドのマットレス級の分厚さを一気に引き裂いたような豪快さだ。

「年上だからって馬鹿にしゃがって! アラフォーを舐めんなよ!!」

ガシャンッ!

花瓶らしき割れ物がクラッシュする。

「こっちから離婚してやるわよ! かかってきやがれ! アホ陛下」!

剛速球で投げ放たれたクッションがノアのいる扉にぶち当たり、扉がその衝撃に耐え切れずに震える。微かに開いた扉が、ぶつかった振動で、もうこれ以上は我慢できな

いと言わんばかりにその口を開き始めた。

扉の向こうでは第二弾のクッションを天高く構えたドレス姿の貴婦人。

呆然と扉の前に立ちすくむノア。

彼女があつと息を飲んだ瞬間にはその凶器は彼女の手を離れ、音速を超えていた。

次の瞬間、隙のない完璧人間と噂のノア近衛隊長の顔面にクッションとは思えない威力のそれがぶち当たった。

嘆きの王妃 その2

国王の妻、王妃殿下といえば、国家の顔である。

発言はもちろんのことファッションや趣味に至るまで全てが注目の的だ。

その一挙一動に国民の期待がかかっている。

もちろんカンナリオ国王エマシユオンの妃、アデリイーも常にその期待に応え、国王のよきパートナーとして国家を支えている。

楚々とした奥ゆかしい淑女は、けして絶世の美女ではないが、儂げな上品さや常に一步引いて国王を立てる謙虚さ、それに慈愛に満ちた微笑で国民の心を掴んでいる。

もちろんノアも敬愛の念を抱く方なのだが……。

1秒前までの自分の中での国王妃のイメージがガラガラと音をたてて崩れていくのをノアは感じた。

常に微笑を浮かべた唇は一定の範囲内から動くことはなく、白魚のような細かい手はフォーク以上に重たい物など持ったことなど見たことがなかった。

それが今はどうだろう。

雄たけびを上げながらバンバン物に当たるアグレッシブさは驚嘆せずにはいられないほどの迫力だ。

目も当てられないほどに散乱したサンルームの真ん中で、肩を怒らせ仁王立ちする姿は眩しいほどに凜々しい。

そこからは儂げなどという言葉は微塵も感じられない。

虫も殺せない淑女が、熊殺しの猛者としてそこに君臨していた。

「……」

「……」

お互いあまりのことにショックが大きすぎて言葉にならなかった。ノアの顔面に炸裂したクッションがずりずりと滑り落ちていく。ぽさっと、情けない音が響く以外サニールームは沈黙を守っていた。

クッションをノアの顔面に投げ付けた格好のまま凍りついたように動かない王妃アデリーー。

その王妃を呆然と見つめるしかできないノア。

どう声をかければいいのか。

お互いにきっかけを掴みそこね、ただただ相手の出方を待つ。しかし、時間だけが流れ緊張感が増すばかり。

（これもダダリアの仕業か？ いや、それよりもどうやって声をかければいいんだ？ 妃殿下が傷つかないようにするには…）

頭をフル回転するも答えは出ない。

今更ドアを閉めて、見なかったことになど出来ない。

ノアは意を決して口を開いたその時、それを制するように鋭い声が割っていった。

「そのみつともないツラをなんとかして、部屋に入ったら？ 隊長さん」

王妃の側にいたメイドがいつの間にかノアの側にいた。

面倒くさげにノアを押しやるとサニールームの扉を閉める。

一人緊迫感の輪から離れたように淡々としたメイドは途惑うノアを一瞥し、興味なさげに足元に落ちたクッションを拾い上げた。

「気の利いた言葉も浮かばないなら、せめて気を利かせて立ち去ればいいのに」

ぼそつと呟いた一言がぐさりとノアの心に突き刺さった。

そのメイドは一切ノアには目もくれず、王妃の側に歩み寄る。

まだ固まっただままの王妃の腕を引くと近くにあった椅子に座るように無言で促した。

緊張の糸が切れたのか、王妃は強張った表情のまま椅子の上に崩れるように座り込んだ。

ノアは黙ってその一部始終を見つめていた。

国王陛下の近衛隊の一員として王妃や王妃に仕えるメイドとはよく顔を合わせる。

しかし、メイドにしてはあまりに年若いこのメイドは今まで見たことがなかった。

年は15、6だろうか。

その熟し切れていない年齢の所為かどこか中性的で、人の目を奪うほどに整った顔立ちと相まって耽美な魅力を醸し出している。

良くも悪くも、ダダリアのように一度見れば嫌でも脳裏に焼きつくほど印象的な姿だ。

ノアと初対面ということ、ノアのいないこの3ヶ月の間に王妃付のメイドになったのだろうか。

俄かにそのメイドに対して疑惑が湧き上がったが、今はそれを追求する時ではない。

ノアは顔を上げると一歩王妃の側に近寄った。

優美なデザインの猫足の椅子の上で王妃は肩をびくりと震わせる。

先ほどまでの獰猛さは息を潜め、自分を守る術を全て失ったかのようにつら痛々しく、その体は小さく見えた。

彼女は儚げな王妃ではなく、ただの哀れな女性だった。

王妃の嘆きようはいかほどだろう。

どんな場でも努めて穏やかで憤み深い王妃を演じてきた彼女が、まさか一衛兵にこのような醜態を見られるとは。

ただの謝罪だけでその心に負った傷が癒えるなど、考える方が浅はかだ。

しかし、ノアにはそれ以上彼女を救える行為など思いつかない。

ただただその心情を慮り、ノアは自分に考えうる最上の敬意を持って彼女の足元に跪いた。

「王宮を守護する者として不審な物音がすれば確認するのは当たり前。よもや妃殿下がいらつしゃるとは思いませんでした。けれど妃殿下を陥れようなどとは考えておりません。今見たことは全て私の心の内に秘める所存でございます」

真摯に頭を垂れ、ノアは王妃の言葉を待った。

「あ、あの、ノア隊長……」

どれだけの時間が経ったか。

か細い声が、途惑うようにノアの上に降ってきた。

ノアは頭を下げたまま、抑揚なく応じる。

変に感情を出しては、逆に王妃を傷つけるような気がしたのだ。

「はい、妃殿下」

「驚いたでしょう。王妃の立場にある者が、このような……奇行を行っていて、貴方は失望したかしら？」

ノアは心を推し量ろうと王妃は一つ一つ言葉を選ぶように慎重に口

を開いた。

ノアを見つめる瞳は猜疑心に揺れ、自分が傷つくと分っていないながらも一番の核心に迫った。

「…驚きはしました」

「でしょうね」

「しかし、失望はしておりません」

「私に気を使わなくていいのよ。私は貴方の本音が知りたいわ」

王妃の声は震えていた。

それはずっと自分の心の中に秘めていた、もう一人の自分に対する負い目をノアの言葉で聞くことを恐れているようだった。

「私、本当は王妃の器ではないのよ。気品もないし、陛下を支えられるほど強くもない。ただ貴族に生まれたから、ただ運が良かったから陛下の妻になることができただけ。本当はどうしようもなく脆くって、物に当たるぐらいしかできない……」

溢れる言葉はいつの間にか嗚咽になり、痛々しい嚙り泣きが殺伐としたサンルームに響いた。

「陛下は本当に素晴らしい人。私も陛下につり合いの取れる王妃であると努力したけれど、でもダメだった。陛下よりも年上だからこっそりしなきゃいけないと思えば思うほど、すれ違ってばかり。そして今は陛下に会うこともできない……」

（それには深い訳が……）

と、ノアは心の中で叫んだが、陛下がひた隠しにしている衝撃事実をノアが勝手に口にする訳にはいかない。痛々しい王妃の独白は留まることを知らない。ノアは一か八かと意を決して顔を上げた。

「妃殿下、私は失望などしておりません。それに陛下は誰よりも妃殿下を大事にされております。私は近衛隊隊長として陛下のお側でお仕えし、そのことを身を持って感じております。だから、そのようなことは決して口に出してはいけません。陛下も悲しまれ……」

自分の感じることを本気でぶつけてみた。が、その全てを口にすることは出来なかった。

ノアは目の前に立つその存在感に次の句が告げられなかった。

「あ、あの、妃殿下……」

恐る恐る呼びかけるノアをキッと見下ろすと王妃の右手が火を噴いた。

「そんな慰めなんか、聞きたくな〜いつ……!!」

王妃の激情をまともに身に受けたノアは言葉通り、宙を飛んだ。

嘆きの王妃 その3

思わず拍手を送りなくなるほど見事な飛びっぷりで床に叩きつけられるように落ちたノアは、信じられないとばかりに目を見張った。

「そんな嘘なんてまっぴらよ！貴方に何が分るの！！陛下は私のことなんて好きじゃないのよ！そりゃそうよね！年上だし、気が利かないし、陛下の前ではどうしていいか分からないからいつも無表情よ！！」

自分を嘲るように言い放つ王妃の目はすわっていて、もうノアの言葉が届かないところまでトリップしている。

王妃は手短に見つけたクッションを握り締めると一気に引き裂いた。真つ二つにされ、綿がはみ出したそれはもう何の利用価値もないばるに成り下がっていた。

だが、そのぼろさえも凶器に変える勢いで、王妃はそれをノア目掛けて投げ付けてくる。

ここまでバレてしまえば後は一緒と考えているのだろうか。

その手には一切の躊躇がない。

弾丸のような勢いで床にのめりこむクッションの成れの果てを素早く避けつつ、ノアは身を立て直した。

「いいのよ！分ってるの！！どうせ私は美人じゃないし、教養も深くないし、趣味もあまりよくないわよ！楽器もさしてうまく弾けないし。それなのに、陛下は毎度毎度演奏会を開いては、私にピアノを弾かせようとするし、嫌味が、おんどりゃー！！」

今度は割れた花瓶の破片を鋭く投げってくる。

破片はまるで曲芸士が操るナイフのように寸分の狂いなくノア目掛

けて襲ってくる。

王妃を傷つけないようにと気をもんでいたノアだが、その攻撃の鮮やかさを前に自分の身を守ることと精一杯だった。

自分を王妃として至らないと嘆き、陛下につり合わないと自分を卑下するが、その大胆な弾けっぷりと攻撃力は圧巻だ。

「失望はしません！」

ノアは王妃の攻撃を必死に避けながら、王妃目掛けて走り出した。

それを阻止するように、花瓶や椅子が飛び交い、サンルームには凄惨を極めいていた。

激しい攻防を繰り広げるノアと王妃。

一人その輪から外れたメイドは、王妃を止めることなく自分だけ安全圏へと避難して成り行きを見守っていた。

「嘘つき！どうせ陛下から私の愚痴とか聞かされてるんでしょ！若い嫁を貰えばよかったとか！私も好きで年上に生まれた訳じゃないわよ！」

陛下と王妃は3歳の年の差だ。

それほど気になることはないとノアは思ったが、女性の立場では気になるポイントのようだ。

10年前、世紀のビックウエディングと呼ばれた二人の結婚は、当時の首脳陣による政略であったと言われている。

だが、その候補の中から今の王妃を選んだのは陛下自身だ。

そして数度二人は面会し、陛下は王妃に結婚を申し込んだと聞いている。

初めから陛下には年齢など気にしていないと思うのだが、いくら訴えかけても王妃は聞く耳持たず。

何があつたのか知らないが、何か二人の間には年齢に関して遺恨が

残る出来事があつたようだ。

「妃殿下！話を聞いてください！陛下はいつも妃殿下のことを自分にはもつたいたない王妃だとばかりおっしゃって……！」

ノアの鼻筋ぎりぎりを猫足の椅子が通り過ぎた。

「信じられるか！貴方もどうせ私のこと馬鹿にしてんでしょ！どうせ女としての魅力もないわよ！結婚して10年も経つのに子どもの一人もいないわよ！！最近陛下とはご無沙汰よ！！だって3ヶ月も部屋に籠って出てこないのよ！！きつと浮気してるのよ！ハネムーン中なのよ！！」

明け透けない夫婦の事情に次の句が告げられない。

本当のことは口が裂けてもけつて言えないが、何も知らない状態で王妃の言葉を聞けば、成程とノアも納得していただろう。

それほどに王妃の言葉は説得力を帯びていた。

それに若い女の子を連れ込んでいるという点は間違っていない。

流石は女性。勘の鋭さは花瓶の投げ方並みには抜けている。

ただ顔を合わせられないのは浮気による気まずさでなく、若い娘にSMプレイをされて喜んでいるからだ。

それにしても王妃と相対しているのが、サンルームで良かったとノアは心底ほっとしていた。

これが騎士の間と呼ばれる応接室だったら、中世の騎士の甲冑やサーベルなどが飾られている。

甲冑を投げ付け、サーベルを振り回されたら、流石のノアも命はないだろう。

想像するだけでぞっと血の気が引く。

「貴方もどうせ私のこと、王妃らしくないと思ってるんでしょ！認めてよ！変に気を使われる方が苦しいの！演じてばかりの自分に、そんな私を尊敬すると言ってくれる周りの期待に、もうどうしていいか分らないの！全てが私をがんじがらめにする」

切実な叫びだった。

涙を流し、髪を振り乱した姿で王妃は全てを吐露していた。

はあはあと肩で息をし、王妃はそのまま床に崩れた。

頭を下げ、ノアの言葉をまるで死刑宣告を待つ罪びとのように待っていた。

ノアと王妃は顔見知り程度の関係だ。

今日はいいい天気ですね、そう話すぐらいの関係。

そのノアに対して、わき目も振らずに突っかかっていくほどに、王妃は限界だったのかもしれない。

高すぎる期待を壊してしまいたかったのだろうか。

「……ねえ、失望してよ……」

「失望はしません」

「やめてよ！この期に及んで、優しい言葉をかけないで。逆に傷つくわ！」

金切り声で王妃は床を叩いた。

しかし、もう先ほどの勢いを失っている。

ノアはゆっくりと側に寄ると、王妃のか細い肩を見下ろした。

（勝手に他人が抱いた王妃像にこの人はずっと苦しんでいたんだ）

それでも期待に応えようとする王妃だからこそ、こんなにも傷だらけになっているのだ。

弱々しく頂垂れた姿に、様変わりした陛下の姿が重なって見えた。

（陛下も、こんな風に何かを抱え込んでいるのだろうか？）

「何度でも言います！失望はしません。むしろ完璧な妃殿下も一人の人間なのだと親近感を感じました。私は粗野で戦うことしか頭のない野蛮な人間です。どうすれば陛下や妃殿下のお側にいても差し支えない人間になれるか日々悩み、思う限りに取り繕っています。だから、妃殿下の今のお姿に失望することなど何一つありません！」

有無を言わさない、強い口調で言い放ったノアを王妃は脅えるように見上げた。

ノアの言葉に一縷の希望を見出すように、ノアの青い瞳をすぎるように見つめる。

普段口下手で、自分の感情をうまく伝えることの出来ないノアは自分に出来る限りの精一杯を伝えた。

「先ほどの花瓶を投げる手つき、鬼気迫る迫力、普段から体を鍛える者として心から感嘆せずにはいられませんでした。そ、それに今日のようにハキハキ話される方が話しやすいと感じました」

若干的外れだとは自分でも感じたが、ノアの口は止まらなかった。ノアのような者に隠していた部分を見られたからといって、彼女の王妃としての権威が失墜したとは思ってほしくなかったのだ。

「妃殿下は演技でも王妃として行動できる素質をお持ちなのです。陛下はおっしゃっていました。どんな素晴らしい技術を持つ音楽家よ

り、妃殿下の優しいピアノの音が好きだと。自ずとにじみ出る優しさまで演じることはできません。ですから、全てを否定しないで下さい。私は……どちらの姿も敬愛する王妃殿下であると思っています」

ぼたり……。

ずっと目頭辺りで我慢していた熱い涙が王妃の目を離れ、床を叩いた。

嘆きの王妃

その4

その涙は優しく床に零れ落ちた。

それが王妃の本当の姿なのではないかとノアは感じた。

楚々とした貴婦人でも、アグレッシブな猛者でもない、ただの普通の女性。

優しくて、だからこそ期待に応えようと自分を偽っていた、どこにでもいる普通の。

ノアは王妃の側にしゃがみ込んだ。

王妃は後から後から涙を流しながら、救いを求めるようにノアを見つめる。

「妃殿下をずっと素晴らしいお方だと思っておりました。だからその素晴しさ故、自分とはかけ離れた方だと遠慮していたかもしれない。私は元来女性が苦手で、それに軍隊という特殊な環境がそれを助長させていましたから。ずっと妃殿下の不評を買わないよう、近付かないように心掛けてきました。それが自分に出来る一番最良の方法だと信じていました。でも……」

「でも……」

「今なら、それが間違いだったと言えます。むしろもっと早く今のお姿に気付いていれば、もっとたくさんのお話が出来たのではと悔やまれるばかりです」

こう言っても信じてくれるだろうか。

また嘘をついていると激怒するだろうか。

でもこれがノアの本心で、こんなにハキハキと心情を語ってくれる

女性なら、ノアも今までほど緊張せずに王妃と話せると思っていた。女性特有の、何か裏の意味を含ませた甘い言葉より、今の王妃のよ
うな裏表ない実直な言葉の方がずっと清々しい。

それに懸命に王妃を演じようとする姿や不器用すぎる性格に親近感を感じていた。

「本当？」

すがりつくような瞳に、ノアは微笑んで見せた。

その不器用な微笑みにノアの本心を見たのか、王妃もたどたどしく口元を上げて見せた。

「陛下にもそのように本音でぶつかられたらよろしいのに」

「陛下には無理よ」

王妃は悲しげに目を伏せる。

それは10年という結婚生活の中で希望を失ったと言わんばかりに悲壮な影を帯びていた。

まだ結婚していないノアが知った顔で夫婦間に秘密など無用ですなどとは言えない。

「妃殿下、私は陛下と妃殿下の心を上手に橋渡しする器用なことはできません。でも、妃殿下のお言葉を聞き、少しでもその悩みを減らすお手伝いなら出来ると思います」

「ありがとう、ノア。貴方は本当に優しいのね。こんな私を見ても真摯に向き合ってくれる」

王妃はそっと涙を拭くと、悲しい影を追い払うように首を振った。

「また、私の話を聞いてくれるかしら？」

「もちろんでございます。ただ、クッションを投げ付けられのは勘弁していただきたい。ただの綿の塊とは思えない衝撃が走りました」

冗談半分、本気はそれ以上に含んだノアの言葉に王妃は顔を真っ赤にした。

「もう！大げさに言うんだから！ノア、貴方って意外と意地悪なのね。冗談を言う人だなんて思わなかったわ」

そう屈託なく微笑む王妃は恥ずかしさを隠すためか、ノアの肩を叩いた。

その力強さにノアはうめき声を上げそうになったが、やっとのところで息をかみ殺す。

（いやいや、本気で勘弁してください！）

これほどの豪腕なのに自覚がないとは、王妃の底知れない実力にノアは戦慄が走った。

「王妃はいつもここで、ストレス発散なさっておいでなのですか？」

ノアは叩かれた肩をそつと撫でながら、世間話のような気軽さで話しかけた。

しかしそれが一番知りたいことである。

王妃のこのストレス発散にダダリアの影があるかもしれない。

「今までは皆が寝静まってから、自分の部屋でこっそりとやっていたの。それこそメイドや侍女達にばれないように、布団の中でこっそりとね。でも、クッションを壊すと何かあったのかと聞かれるし、あまり無茶できないでしょ？いつもはクッションを殴るぐらい。後はどうしても我慢できない時はそつと庭園の奥にある森に分け入って、木に向かって当り散らしていたわ」

木に向かって当り散らす、というのはどういう行為なのか。

王妃は恥ずかしげにうじうじと指をつき合わせながら話す様子からは想像も出来ないが、きつとそれもぶっ飛んでアグレッシブなのだろう。

いっそ情けない部下達を王妃に預けてみてはどうだろうかとノアは真剣に考えた。

しかしそれは熟女好きなど公言してはばからないアンディー一人を喜ばす結果になるという答えに至ったので、そつと心の中で却下する。

「でも森にはそう簡単には行けないでしょ？どこに人の目があるか分らないし、至る所に警備がいてるし。本当に苦労したわ」

ノアには想像も出来なかったが、王妃という立場上色々考慮しなければいけないのだろう。

王妃の語りから想像するに、王妃のこの行き過ぎたストレス発散法はずっと前から行われていたようだ。

そこにダダリアの影はないと判断し、ノアはほつと胸を撫で下ろした。

夫婦揃って、あの女に弱みを握られているなど一家臣としては見過ごせない。

「でもね、もっと派手に暴れてもばれない場所があるって教えても

らったから。本当にここはちょうどいいわ。防音だし、あまり物も置かれていないから、気兼ねなく暴られるし。それに元から割れてゴミになった花瓶や食器も用意してくれるから、思いっきり投げられるし！ノア、貴方も一度やってみてはいかがかしら？とってもスカッとするわよ！」

屈託なく微笑むと王妃はノアにクッションを手渡した。ノアをストレス発散仲間だと勝手に認めているようだ。それを途惑いしつつもノアは受け取る。

「ありがとうございます。私のこともお気使い下さって。私は何かあれば部下に当たって発散してますが、これからは時々クッションも交えてみます」

などとアンディーたちが喜びそうなことを殊勝に言ってみたが、よく考えればノアのストレスの原因は大体部下だ。

ストレスを与えた本人らに返しているのだから、これ以上ないストレス発散方法だとノアは思っている。

話半分にどうやって投げれば王妃のように投げれますか、などと聞きながらも、ノアは王妃にこの部屋存在を教えた者の情報を引き出そうとした。

「確かに防音なら誰にも気付かれませんね。今日のように扉が半開きでなければ」

「きっと激しく扉に当たり過ぎたのね。扉が勢いずり開いてしまうなんて。これからは気をつけないと！」

王妃は強く決意した目で大きく頷く。

この様子では近日中にまた、このサニタールームが悲惨な状況に置かれ

るのは想像に難くない。

「よくここを思いつかれましたね。誰の思い付きですか？」

「王妃様、今日はこの辺りにされてはいかがですか？」

抑揚ない声が割って入った。

淡々としていて、それでいて有無を言わせない。

危うげな美しさを湛えたメイドが何時の間にか二人の側に立っていた。

「そうね。ノアに話を聞いてもらってスツとしたし、今日はもうお開きね」

立ち上がるうとする王妃にノアは手を貸す。

王妃の名に恥じない手つきでノアの手を取ると、ゆっくりと立ち上がる。

自分も立ち上がるうとしたノアは、不穏な視線を感じ眉を潜めた。じっと自分を見つめているのは無表情のメイドだ。

「さあ、それでは私は先に引き上げますわ。ああ、部屋のことは気にしないで。この子がちゃんと片付けてくれるから」

王妃はにこりと微笑んで、メイドを振り返る。

「この子、若いけど気が利いて優秀なのよ。この場所だって彼女が教えてくれたの。今は彼女がいなければ私の生活はままならないの、ねえ、リリオン」

「勿体無いお言葉です、王妃様」

リリオンと呼ばれたメイドは慇懃に頭を下げた。
しかし刺すような視線をノアに向けたまま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000o/>

S・S・S～メイド様のキ・ケ・ンなご奉仕　～

2010年11月19日00時36分発行